



2020年
3月

東日本大震災と「記憶」の記録化

— 試みとしての地域史・写真展・記憶地図・街の復元 —

東日本大震災と「記憶」の記録化

—試みとしての地域史・写真展・記憶地図・街の復元—

著者

金子祥之 西村慎太郎 吉田智彦
鹿目久美 植田今日子 槻橋 修

編者

金子祥之

本書は2019年12月21日に、跡見学園女子大学文京キャンパスにて開催された、公開シンポジウム『東日本大震災と「記憶」の記録化一試みとしての地域史・写真展・記憶地図・町の復元一』の成果をまとめたものである。当日は約60名の学内外の、多様な方々（研究者・学生・一般の方々）にご参集いただき、活発な議論が交わされた。

公開シンポジウムを開催することは、跡見学園女子大学地域交流センターにとって、初めての経験であった。ご登壇いただいた先生方、ご参集くださいました方々、準備にご協力をいただいたみなさま、多くの方々のご協力に感謝申し上げます。

表紙写真

唐桑町地福寺、御施餓鬼供養（植田今日子氏撮影）

詳細は46頁を参照のこと

目次

記憶の記録化に寄せて	笠原清志	2
被災地との地域交流のこれまでとこれから	金子祥之	6
原子力災害地域の歴史を未来へ紡ぐ	西村慎太郎	13
笑顔の向こうがわ	吉田智彦・鹿目久美	26
『更地の向こう側』の記憶地図	植田今日子	40
ふるさとの記憶	槻橋修	59
総合討論		70

記憶の記録化に寄せて

—生活の営みをいつまでも忘れない—

笠原 清志（跡見学園女子大学学長）

十二月の押し迫った時期に、文京区の後援を受けて、跡見学園女子大学にて、『東日本大震災と「記憶」の記録化』のシンポジウムを開催できたことを、非常にうれしく思っています。ご参加をいただきありがとうございます。

数字の背後にある悲劇

二〇一一年三月十一日午後二時四十六分に、震度七、マグニチュード九の大地震が三陸沖一三〇kmの海底で発生しました。この地震発生後には、史上空前の大津波が発生しました。甚大な数の犠牲者、海岸線の村や町の消滅、社会インフラの崩壊、福島第一原子力発電所の事故、そして多くの人たちの避難といった問題が発生しました。その規模は、私たちの想定をはるかに超えた史上空前の大災害であったと、思われます。

警察庁がまとめた二〇一六年二月十日現在のデータによると、一連の余震、津波での被害者は一五八九四人、行方不明者は二五六二人となっています。しかし、この数字の背後には一人一人の個人

と家族の苦悩と悲劇があつたはずです。数字のみで語られると、いつの間にか震災の悲劇がスーッと視野から消えてしまうような気持ちになつてしまいます。

生活の営みをいつまでも忘れない

震災の脅威を目の当たりにすると、私たちの生活の営みなど一瞬の残影にすぎない、と痛感させられます。台風、地震、津波などの自然の脅威にさらされてきた日本人は、その被害を忘れようとする、あるいは諦めることによつて心のバランスを保つすべを身につけてきたのではないのでしょうか。それは諦めや無常の観念につながりますが、他方で死んだ人たを忘れない、そしてその人たちとの生活の営みをいつまでも記憶しておこうとする考え方も受け入れているように思います。この矛盾する観念が複雑に絡み合うことによつて、日本人特有の精神構造が成り立っているように思います。

私たちは諦めや無常といった観念を持ちながら、しかしそうであるからこそ死んだ人のことをいつまでも忘れないといった気持ちも大切にしてきたことです。独特の宗教観とともに、命日や何回忌といった形で死んだ人を想い、あるいは祭りという形で記憶し習慣や伝統という形で残しておく、ということも行われてきました。

ポーランドにおける記憶の記録化

ポーランドでは、この問題が歴史と戦争の記憶とがワンセットになつて存在しています。ナチス・ドイツがポーランドを攻めたときに、ワルシャワの街は徹底的に破壊をされました。戦闘によつて破壊されたというよりは、ナチス・ドイツは意図的に“そして徹底的にワルシャワの建物や歴史、文化

を破壊していったと言われています。

私たちは自らの歴史や文化、習慣を失えば、民族ではなく単なる人間になってしまいます。ポーランド人が単なる人間になってしまえば、その後のポーランド支配が容易になるということです。ナチス・ドイツは極限まで突き詰めた優越思想に導かれて、ポーランドを、とりわけワルシャワを破壊していったのではないのでしょうか。戦後、ポーランドの人たちは、その破壊の意図が分かっていたからこそ、執念で破壊をされたワルシャワの街の一部を再建しました。それがスターレ・ミアストといわれる旧市街地で、現在は観光地となっています。

破壊された旧市街地は、写真や資料、生き残った人々の記憶を手掛かりに、寸分の狂いもなく再建されました。例えば、教会の前にベンチが二つあった、その前のレストランの窓ガラスは、どのような感じだったか。その隣にあった建物は何色で、どのぐらいの広さだったか。旧市街地再建は、ポーランド人の執念とプライドに導かれ、そして民族意識の覚醒に大きく貢献しました。他方で、参加した人たちのネットワークがつくられて、それが戦後のポーランド社会再建の力になっていったと言われています。

日本社会の行方

今日、東日本大震災で破壊をされた日々の生活の営み、街の風景、なくなってしまった小学校などをいろいろな方法で再現し、復元していく試みが生まれています。今回のシンポジウムの報告者は、さまざまなかたちで「記憶の記録化」活動に関わってきた人たちです。日本におけるこのような活動が、ポーランドのように参加した人たちのネットワークの形成とその後の社会形成のエネルギーにな

るのでしょうか。今回のシンポジウムは小さな試みですが、どのような方向に発展していくか注目されます。

私たちは死んだ人たちのことを忘れない、そしてその人たちとの生活の営みの記憶を大切にしていきたい、と思っています。東日本大震災復興は困難を極めています。被災地においても新しい試みも生まれてきています。私たちは、「記憶の記録化」という視点から震災復興後の社会について考えていけたらと思っています。今後ともよろしく願います。

被災地との地域交流のこれまでとこれから

—— 跡見学園女子大学での取り組みをもとに

金子 祥之（跡見学園女子大学）

被災地といかに関わっていくのか

本日のシンポジウムの全体像をご紹介します。冒頭、私から趣旨説明をさせていただき、それについて四組の先生方にご報告いただきます。すべての報告が終わりましたら、最後に総合討論の時間を設けておりますので、ぜひご質問していただければと思います。

それでは、はじめに、私から趣旨説明として、なぜいま本学で記憶と記録化を考えようとするのかについてご説明いたします。本シンポジウムを開催することになった契機は、つぎのような問いにあります。それは東日本大震災に対して、いま、私たちに何ができるのかという、大変大きな問いです。私も跡見学園女子大学は近年になって、地域交流センターを組織し、それを拡充してきている経緯があります。とくに本年度は、地域交流センターの組織が充実をしました。本学としては、地域社会との交流を促進して、学生たちにより深い学びを提供できればと考えています。また地域のみならず、まのお役に立てる機会があればと思っております。

そのなかで、被災地とどのような関係を持つていくことができるのかといったテーマが出てきまし

た。この問いは、決して本学だけに閉じた問いではありません。ここにいる皆さまは、それぞれ震災に関心があることでしょ。すでに震災から八年以上の時間が経過をしておりますので、どのようにして被災をした地域と関わっていくのかということがあらためて問われているように思います。震災直後とはまた違った関わり方が要請されているように思うからです。その意味で、これからお集まりくださいましたみなさまとともに考えていく問い（東日本大震災に対して、いま、私たちに何ができるのか）は、いわば「開かれた問い」であると考えています。

震災から、八年以上の時間が経過しました。そのため、社会的な関心は薄れているとの実感もあります。私が大学の教壇に立ったのは二〇一四年で、山梨県立大学や立教大学で講義を担当しています。その当時、学生たちに向かって、「震災の話をする」と言うと、それまで話を聞いていなかった学生たちも、集中してくれたのがよく分かりました。ところが二〇一九年になって、同じように「震災の話をする」といっても、ふつうの講義のひとつと同じ反応しかえられません。時間の経過とともに、学生のリアクションが全く違うものになってきていることを肌で感じています。

跡見女学校・女子大学での取り組み

さてそれでは、跡見学園女子大学や、前身の跡見学校が震災の問題とどのように向き合ってきたのかを簡単に振り返ってみます。

本学は、日本で最も歴史のある女子大学のひとつです。明治三陸津波の時点で、すでに跡見学校は存在していました。学祖の跡見花蹊の日記をひも解いてみると、明治三陸津波の記述もあります。発災したのは六月十五日で、津波について日記の中に出てくるのは六月十七日です。大変に大きな津波

で、多くの方が亡くなったとの記録が出てきます。続いて、六月二十二日の記録では、義援金を集める活動をしたと書かれています（花蹊日記編集委員会、二〇〇五a、『跡見花蹊日記 第二巻』）。

私が大変興味をひかれたのは、花蹊が学生たちに義捐金を集めさせていることです。個人で寄付することももちろんできたでしょうが、花蹊は女学校の学生たちにこの活動を委ねています。より詳しい検討が必要ですが、おそらくこうした被災地支援も教育の一環と、花蹊は考えていたのではないのでしょうか。そして、六月二十七日には、集まった義援金五〇〇円を被災地に送ったと書かれています。

私たちの学祖である花蹊は、災害支援に強い関心を持っていました。明治四十三年の洪水は、歴史的な水害で、利根川が過去最大規模に破堤をしました。そのときも自分の家に千袋の布を集めて、そこにパンを集めて、避難所へ送ることもしています（同、二〇〇五b、『跡見花蹊日記 第三巻』）。

そうした伝統を持つ私たちの学校は、3・11でも被災地との交流を行ってきました。その中で大きな活動は、会津若松市との地域交流活動です。福島県は、日本でも大変に大きな自治体の一つです。地域によって被害の実情は全く異なるにもかかわらず、会津若松は観光客の方が全く来ない状況に置かれていました。本学では、観光の形で地域交流を促進して、観光客を呼び込むPR活動などを行ってきました。

川内村での試み

地域交流センターができた今、こうした蓄積をさらに拡大していくことが、私たちの願いです。実際に本年度から福島県の浜通り地方で、二つの活動がスタートをしました。飯舘村と川内村での活動を行っていて、私はそのうちの福島県の事業に採択をされて、川内村へ学生たちと一緒に勉強に向

いています。

川内村の集落へ行くきっかけになったのは、集落のリーダーである行政区長さんの言葉です。その区長さんは七十代ですが、集落の中では若手です。区長さんの言葉は、たいへん印象的なもので、つぎのような内容でした。「ふと寝る前に、十年たったら一体、ここにどれだけの人が残るのだろうか。それを考えると、寝ても寝付けないような気分になる」とおっしゃっていました。つまり、あと数年の間に集落が消えてなくなってしまうかもしれないことへの不安を吐露されていたのです。そのような状況をお聞きして、私はこの地域に出掛けて行って、地域が持ってきた豊かな文化を記録していきたいと考え始めました。川内村は、福島第一原子力発電所から二〇から三〇キロメートルの位置にあります。

簡単に現在、私たちが行っている活動内容について紹介をします。集落の区長さんとともに、帰村をされた方の中でキーパーソンになる方を回って行って、その方々に学生たちと共にインタビュー調査を行っています。集会所を借りて、調査を続けています。皆さんがもし川内村を知っているとしたら、つぎのような文脈で記憶をしているのではないのでしょうか。それは強制避難になった地域で、最初に帰った復興の旗手となった村です。震災前は三千人いた人口のうち、現在までに約二千人の方が帰還をしています。三分の二が村に戻ったわけです。

確かに数字上は、多くの人が戻りましたが、実際に定住している多くは高齢者世帯です。ですから、私たちが調査をしていて気付いたのは、文化が消えていくといった深刻な問題です。例えば、私どもが調査をしているのは七区といわれる一つのコミュニティですが、祭礼は中断をしていくか、消えていっています。日本の農山村にはふつう、地域コミュニティには、地域ごとにシンボルとなる神社が

あります。そうした神社は、比較的新しいものでも三百年や四百年の歴史を持つてることが普通ですが、その神社も地元の人たちは帰す〔祭祀を止める〕ことも考えています。私は民俗学や農村社会学が専門で、神社は地域にとって最も大切な存在であると学んできましたから、全く信じられないことです。

あるいは農業について考えてみますと、地域には八十軒の人たちが住んでいますますが、いま農業を行っているのは、わずか五軒となつてしまいました。あるいは葬儀を取り上げてみますと、これまで集落の人たちが共同で人の死を弔っていたのが、サービスへと移行をしていくことになりました。他には、集落組織を支えてきた班や青年組織などの重要な組織が、確実に弱体化をしていつています。その中で私どもが取り組んでいるのは、消えていくものを記録することになっていると、あらためて実感しています。

この地域は、頭屋制といわれる祭祀のやり方をしていて、村の中で一軒を決めて、その人が神様を責任持つて拝みます。翌年になると、隣の家に移つていきます。ある地区では、百数十年にわたつて、祭祀の記録が残っています。その中の最後のページには、平成二十三年の東日本大震災で全員が避難をしたので、祭典は中止をしますと書かれています。この神社の場合は、平成二十六年の段階で形だけは祭りが復活をしますが、本当のところは復活をしたとは言えません。小学生の子どもたちによる神楽が地区をめぐつて歩きました。しかし、それらは途絶えたままであるからです。

なぜ記憶・記録を残すのか

この活動を始めたことで、あらためて問いとして浮かび上がってきたのは、記録を残す営みにはどのような意味があるのかということでした。その一つのヒントとして、山古志村の元村長である長島さんは、次のように述べています。震災は、歴史や文化を失う契機となってしまふ。それらが本来なら心のよりどころとして機能をしていたので、歴史や文化を残していくことが大切であるとの指摘をしています。この長島さんの議論を受けて、民俗学者の山泰幸さんは、象徴的復興といった考え方を提出しています（山泰幸、二〇〇六、『象徴的復興』とは何か『先端社会研究』（五））。これが今日、まさに皆さんと共に考えたい、記憶の記録の部分と深く関わっています。

象徴的復興とは何を意味するかといいますと通常、私たちの復興といえば、土木的により良いものをつくっていくことを意味してしまいがちです。山先生はそうではなく、本当の意味での復興は、被災をした人たちが区切りを付けられることが復興で、その感覚を得ることが大切であるといっています。その中で、地元の人たちが育んできた歴史や文化は、大きな意味を持つはずです。

そうはいっても、私どもは活動を始めたばかりなので、登壇してくださる四組の先生方から、お知恵を拝借できればと考えております。いずれの先生方も記憶を記録化していく活動を通じて、象徴的復興を支える活動をされています。

登壇者を簡単にご紹介させていただきます。最初にご登壇いただくのは、歴史学が専門である西村慎太郎先生です。原子力発電所による災害を受けた地域の地域史を作っておられます。戻ることが困難になった土地の歴史を描き、土地の記憶をつないでいく興味深い活動をなさっておられます。二番

目の登壇者は、吉田智彦先生と鹿目久美先生です。歴史や文化といえば、古くからあるものを想定しますが、震災では新たな拠り所も必要となりました。お二人はそうした母子の新たな拠り所をつくる実践、そして災害の経験を伝えるために、写真展や、語り部の活動をなさっておられます。

三番目の登壇者は、社会学の植田今日子先生です。津波で強制移転となった地域の、集落の記憶地図を作るといふ活動をされました。津波で多くが失われていくなかで、美しい記憶地図はどのように作られていったのでしょうか。最後の登壇者は、建築学が専門である槻橋修先生です。槻橋先生からは、震災前の町を模型で復元する「失われた街プロジェクト」についてお話を頂戴致します。

東日本大震災とその被災地域に住む方々、そして現在も避難生活を続けている方々と、どのようにかかわることが望ましいのか、お集まりくださいました皆さまとともに考えを深めていけたらと思います。以上、私からの趣旨説明となります。

原子力災害地域の歴史を未来へ紡ぐ

——大字誌という方法

西村 慎太郎（国文学研究資料館）

1. 報告趣旨と自己紹介

国文学研究資料館の西村慎太郎です。どうぞよろしくお願ひします。最初におわびをしなければなりません。今日のシンポジウムが終わった直後に福島県富岡町に行つて、明日の朝から大熊町の帰還困難区域で、歴史資料のレスキュー作業があります。安全靴のままの薄汚れた格好で大変、申し訳ありません。今日の話には臨場感があつていいのではないかと感じているので、ご理解ください。今回は、三十分の時間を与えられているので、簡単に今、僕が続けている『大字誌』の活動について話をしていきます。

本報告では、最初に、人類史上、未曾有の人災である、福島第一原子力発電所による事故の周辺の現状、先ほど金子祥之さんからも少し話がありました、それについて話をしていきます。本題としては、福島第一原子力発電所事故における歴史資料の保全活動と、それを『大字誌』という形で還元をする実践の検証を行います。

簡単に自己紹介をします。現在は、東京の立川にある人間文化研究機構国文学研究資料館に勤務を

しています。あともう一つ、NPO法人歴史資料継承機構じゃんびんの代表理事も務めています。今日は、受付に当会のニューズレターのじゃんびんを置かせてもらいました。

僕の専門は、日本の歴史学の中でも近世史研究です。もともとの研究自体は、京都における天皇や朝廷、お公家さんといった人たちの身分制や、天皇朝廷の権威がどのようにつくられていったかの研究をしていました。それとは別に大学生の頃から、古文書を中心に地域に残された歴史資料をどのように残していくかという活動をしていて、最初はボランティア、その後にNPO法人として歴史資料の保存をしていました。本題に入る前に前提として、歴史資料を残す活動について簡単に話をおきます。

2. 歴史資料を残す取り組み

各大学の取り組み

歴史資料を残す活動は、僕だけがしているのではなく、自治体やいろいろな団体、大学や研究機関が行っています。例えば、富岡町や双葉町、大熊町などの浜通りでは、自治体として独自に歴史資料を残していく活動が行われています。大学関係でいえば、東北大学の方々を中心に組織されているNPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク、福島大学の方々を中心としたふくしま歴史資料保存ネットワーク、また、福島大学では富岡町と連携して資料の保全を進めています。その成果を『ふるさとを想う まもる つなぐ ―地域の大学と町役場の試み―』（富岡町・福島大学・福島大学うつくしまふくしま未来支援センター、二〇一七年）という本にまとめています。

また筑波大学の事例として、白井哲哉さんが行っている「福島県双葉町の東日本大震災アーカイブ

ズ」というプロジェクトも重要です。これは双葉町内の震災資料と被災資料を後世に遺そうというものです。震災資料という点でいえば、例えば、避難場所におけるさまざまな資料、激励のための千羽鶴や凧、避難所で「受付」と書いてある紙などを残していくプロジェクトを白井さんは行っています。

じゃんぴんの活動

僕自身がしているNPO法人じゃんぴん（以下、じゃんぴんと略します）の活動について話をします。じゃんぴんでは、関東甲信越を中心に、さまざまな地域の歴史資料の保全・保存と、それを地域自治体や住民と共有化をしていく活動をしています。簡単にいえば、歴史資料の救済や保存処置、調査研究、普及活動、教育、修復などです。二〇〇六年から活動を行っています。地域歴史資料を軸にしながら、地域持続にとって、歴史研究者として何ができるかと考えて進めています。これまでに四十三カ所の現場を持っており、現在では八カ所で進めています。

その活動に関しては、先ほど話をしたニューズレターに載っているのを見てみてください。時間が限られているので、じゃんぴんの活動と目標はホームページに掲載をされているので、ぜひとも見てくださ（<http://rekishishiryō.com/> または「じゃんぴん」で検索）。歴史資料を永年にわたって残してその地域の人々と共有をしていく活動だと考えてください。本日は事例として、福島県の浜通りで行っていることの話をしたと思います。じゃんぴんが東日本大震災や、福島県浜通りと関わりを持つ契機となったのは、茨城大学の方々が中心となって組織されている茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク（以下、茨城史料ネットと略す）の活動に、われわれが協力をしたことにはじまります。

茨城史料ネットは、二〇一一年七月に発足をした団体です。これは津波被害や家屋の倒壊などで、

さまざまな歴史資料が茨城県内で危機的な状況にあり、それを救出しようとする活動です。今でも活動は続いていて、平成二十七年九月関東・東北豪雨で被災した常総市の水損資料の保全も行っています。作業に従事をしているのは、茨城大学の高橋修さん・添田仁さん・佐々木啓さんなどの教員を中心に大学院生や学部生がさまざまな保全作業をしています。

じゃんぴんと茨城史料ネットとの関係としては、二〇一一年七月、北茨城市における歴史資料の救出活動に協力したのが最初で、二〇一二年一月からは継続的に作業に協力してきました。

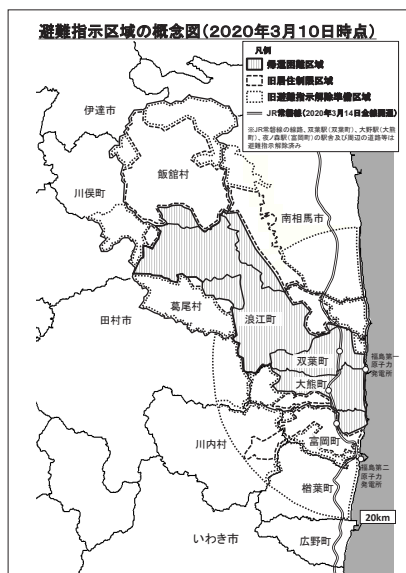
福島県内の話で申しますと、二〇一一年八月、原子力災害被災地域は一時帰宅が認められ、茨城史料ネットが福島の浜通りに関する歴史資料の保全を進めていました。当時、茨城史料ネットの事務局に双葉町出身の学生・泉田邦彦さんがいたことに端を発します。じゃんぴんとしては二〇一二年より救出した双葉町の歴史資料の目録作成に協力していきました。本日、お話しする福島県浜通りの大字誌もこの活動の延長線上から生まれてきました。

また、双葉町内の古文書の中でも虫損が激しいものがあり、線量を測って問題がないために、当会を仲介した東京都新宿区の東洋美術学校保存修復科で修復しています。

3. 浪江町請戸の『大字誌』を編む

請戸にとつての震災被害

当会の活動に関しては以上で、今日の中心となる話は二つです。一点目は、福島第一原子力発電所事故以降の浪江町請戸の『大字誌』について話をします。先ほどから言っている『大字誌』とは、大きい字と書いて、おおあざと読みます。大字とは、簡単にいえば今の市区町村のさらに下の単位で



【図1】避難指示区域の概念図

す。ここでいえば文京区大塚ですが、その市区町村の、下のレベルでの自治体と考えてください。このような集合体は、江戸時代においては村でした。それが明治の大合併や町村制の施行、昭和や平成の大合併において、どんどんと広域化をして、もともとの自治会レベルの単位は、大字で形成をされています。

まずは、福島第一原子力発電所事故について振り返ってみます。三月十一日のマグニチュード九・〇の地震発生以降、この日の午後七時三分の段階で当時内閣総理大臣を務めていた菅直人さんが原子力緊急事態宣言を発表しています。その後は時間を追って、三キロメートル圏内の避難指示と、一〇キロメートル圏内の避難指示を出しています。今回、話をする浪江町や双葉町の僕が関わっている地域は、一〇キロメートル圏内に該当するので、かなり早い段階で避難指示となった所です。

翌日の十二日の午後三時三十六分に、福島第一原子力発電所の一号機の建屋が吹っ飛んでしまったのは、皆さんも映像などで見ているのではないのでしょうか。大熊町と双葉町のちょうど境にあるのが福島第一原子力発電所です。大熊町側に一号機から四号機、双葉町側に五号機と六号機があります。現在の状況は先ほど金子さんからも紹介がありましたが、帰還困難区域と避難指示解除準備区域の二つに分かれています。

【図1】は経済産業省が発表しているものです。帰還困難区域と避難指示解除準備区域を示しています。

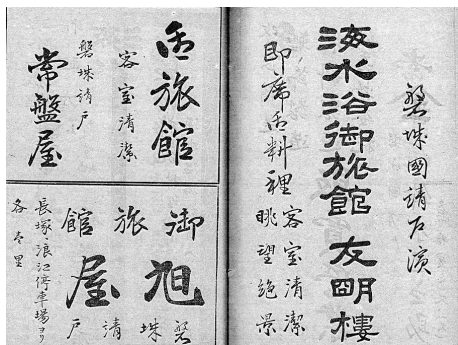
す。避難指示解除準備区域に関しては後でも話をしますが、そこに双葉町の復興拠点がつくられることになりました。なお、避難指示が解除になった区域でも、例えば防災集団移転促進事業のためにインフラストラクチャー整備を行わないとのこと、人が住めなくなっている場所もあります。

今から話をする浪江町の請戸は現在、浪江駅から徒歩で入ることもできませんが、沿岸部は人がもう住めません。まさに防災集団移転促進事業のために住めない状況になっています。来年以降の状況に関しては、二〇一九年十二月十九日に配信された毎日新聞にも掲載をされていました。避難指示が解除になるとの記事がありました。避難指示解除準備区域の所が、基本的には入れるようになる。の記事で、この辺りはぜひとも毎日新聞などで見てください。原子力規制委員会による放射線のモニタリング情報では、今日の午前段階で毎時〇・一〇六マイクロシーベルト ($\mu\text{Sv/h}$) です。今は追加被ばく線量の基準が毎時〇・二三マイクロシーベルトとなっているので、特に問題はないといった感じですが（但しこの値は福島第一原子力発電所事故以降の「追加被ばく線量」です。事故が起きたために自然界の放射線量毎時〇・〇四マイクロシーベルトの六倍になっているということを理解してください）。先ほど言ったように明日は大熊町に行くので、空間線量計を持っていますが、先ほど茗荷谷駅で測ったところ、毎時〇・〇四マイクロシーベルトです。通常の自然界と同レベルなのがよく分かります。

請戸は東日本大震災の津波によって、地区の全部の建物が全壊流出をしています。そして、福島第一原子力発電所事故によって、立ち入りが制限され、やがて避難指示解除準備区域に指定をされて、二年前に解除をされています。現在は、防災集団移転促進事業地区のために沿岸部に住めない状況です。



【図3】請戸（2018年3月19日撮影）



【図2】『双葉郡誌』広告

請戸の歴史

浪江町請戸は、江戸時代においては東回り航路の寄港地の一つで、近代以降はカツオ漁と、かつお節生産が盛んな所でした。また、この地域は近代から震災直前まで海水浴も非常に盛んでした。【図2】は大正時代のある雑誌で、請戸浜や請戸港で海水浴の旅館がいくつも建っていたとことが、雑誌に書かれています。ちよつと言にくい話ですが、旅館といっても単なる旅館ではありません。色街的な要素を持つている場所でした。その後も海水浴場として盛んであり、非常に多くの方々が海水浴に訪れていたようです。実際に震災直前の広報などを見ると、二〇一〇年夏に海水浴客が捨てたごみなどを集めて、全部で一七〇キログラムになったとの記事も掲載をされていたので、かなりの方が来ていたことが分かります。また、請戸の花火大会は非常に著名で、数万人規模の人たちが訪れていた花火大会もありました。

【図3】は現在の請戸の沿岸部の状況です。去年（二〇一八年）三月十九日に撮影をしたものです。全壊流出といっても残っている所もありませんが、ほとんどは住めるような状況ではありません。もう瓦礫もなくなつて、人がいたのかどうかも分からないような痕跡になっています。このように原っぱ上になっている所もあれば、大規模な堤防を造つて、資材置き場になっている所もあります【図4】。地元のお



【図5】 茗野神社 (2018年3月19日撮影)



【図4】 請戸の資材置き場 (2018年3月19日撮影)



【図7】 大平山霊園の慰霊碑 (2018年3月19日撮影)



【図6】 請戸の堤防から南側の眺望 (2019年8月4日撮影)

祭りもあつた茗野神社も全壊流出を
してしまつて、現在では震災後に仮
の小さなお社を作つて、お参りをし
ています【図5】。

それ以外にも流出を免れた石造物
などもあつて、何とか保全をしたい
と考えています。中世の五輪塔もあ
り、これは地元の武将・標葉氏の墓
だと目されます。かなり貴重な墓石
です。【図6】は堤防の上に乗つて、
写真を撮つたものです。福島第一
原子力発電所の煙突が見えています。
大きな建物が請戸小学校です。こ
こは二階の部分まで津波がきました。
地震が発生した直後は七七人の児童
の方がいましたが、先生たちが先導
して二キロメートル先にある山まで
走つて難を逃れました。児童たちが
逃れたところが大平山でして、霊園



【図8】『大字誌ふるさと請戸』

なっています。浪江の方々のための慰霊碑もある場所です【図7】。

4. 双葉町両竹の『大字誌』を編む 執筆経緯と模索

二〇一六年、双葉町の両竹地区の泉田邦彦さんから、『大字誌』の歴史編を執筆してほしいとの依頼がありました。双葉町の両竹は、請戸の隣町に該当をする所で、まさにすぐ近い場所です。

当時、彼自身は東北大学大学院の博士後期課程の大学院生でした。地元のことなので、ぜひともしたいとのことでしたが、なかなか全部の時代を通してはできない。そこで西村に執筆のお誘いがありました。そして、神戸大学の古代史に関して松下正和さん、近世に関しては国立歴史民俗博物館の

天野真志さん、請戸湊に関しては流通史研究者である井上拓巳さん、僕自身は近現代を書くといったように、みんなで分担執筆をすることにしました。この歴史編の執筆に際して注意した点として、第一に、何よりも将来の中学生でも読破をできる内容にすることです。比較的簡便な書き方にしようとのことでしたが、好奇心はちゃんと担保しつつも、記述の平易化をする。第二に、単純に簡単に書けばいいわけではなく、資料に即したものにします。第三に、近現代に関しては、聞き取りの調査なども充実をさせていくと決めました。そして『大字誌ふるさと請戸』が刊行されました【図8】。これに関しては、本に出すだけではなく、話した方が皆さんに通じやすいのではないかというこ



【図9】両竹諏訪神社より南側の眺望（2019年2月9日撮影）

とで、二〇一八年十月十三日にせんだいメディアアテークのオープンスペースを借り切って、シンポジウム「福島県浜通りの歴史と文化の継承―『大字誌ふるさと請戸』という方法―」を開催しました。また、今年（二〇一九年）十月二十七日に請戸の総会がありました。今、請戸の方は散り散り、ばらばらに住んでいます。年に一回集まってくるの総会をしています。その総会の午後の時間を利用して、「請戸の歴史と文化を知る会」を開催しました。

次に両竹の話。双葉町両竹・浪江町両竹（両竹は両町にまたがっています）の『大字誌』についてです。請戸地区の南側が両竹地区です。両竹地区には復興記念公園ができてしまっています。人々が住んでいた土地に復興記念公園が建ってしまうという状況です。そして、両竹地区が双葉町の復興拠点となっていくきます。但し、最近では、原子力規制委員会による放射線のモニタリング情報がずっと「調整中」となっていて、数値が分かりません。容易に人が入るところだからこそ、なのでちゃんと線量を測ってほしいです（本稿の校正をしている二〇二〇年二月一日段階では稼働されていて毎時〇・〇八一マイクロシーベルト）。

両竹の歴史

両竹は、どのような所か【図9】。この辺の前近代の歴史もたいへん面白い土地なのですが、時間の都合上、割愛致します。近代以降の重要な点として、一九五八年・一九六〇年、いわゆる昭和の大合併で両竹地区は、請戸に近い北側が浪江町に、南側は双葉町になりました。

同じ大字なのに、二つに分かれてしまいました。

現在、双葉町側は避難指示解除準備区域に設定をされていて、浪江町側全域を含むところに復興記念公園が建設されます。人びとが住んでいた上に復興記念公園ができるということは、それまでの歴史や先人たちの痕跡の破壊であり、震災や原子力災害から始まる歴史に他ならないといっても過言ではありません。

クラウドファンディング

このような地域の特異性を踏まえ、請戸地区での大字誌刊行を経て、両竹地区でも大字誌刊行ができるのではないかと思いました。どのようにしようかと考えた結果、クラウドファンディングでお金を集めることにしました。そして、二〇一七年十月より朝日新聞社クラウドファンディング A-point にて『双葉町両竹の歴史と遺産を後世に。出版物を同地区の全戸に配りたい』をスタートさせて、大字誌を作って、地元の方々に無償で配ることをしていました。この計画、もともとは二〇二〇年に本を作ろうと考えていましたが反響が大きく、活動自体を見直しました。まずは刊行を前倒しにして、二〇一九年に出しました。二〇二〇年では、あたかも復興をしたかのように見られてしまうのが、しやくだったので、前年に前倒しをすることにしました。もうひとつはブックレット形式で、一年に一冊ずつで、一〇冊を作ることにしました。これは次世代につなぐとの発想です。今年、刊行をするので、一〇年後には一〇歳の子が二〇歳になって、次の世代につなげていけるだろうとのことです。

もうひとつは、クラウドファンディング募集中に毎回、この地区に関するコラムを書くこととを一一三日間続けました。これは、クラウドファンディング終了後、双葉町が行っている地元の方の



【図11】『大字誌両竹』創刊号



【図10】『もろたけ歴史通信』vol.44

みが見られるポータルサイトで、同じような歴史の話などを配信していく「もろたけ歴史通信」に繋がっています（二〇二〇年二月一日段階で全四号【図10】）。目標額は六六万円を本を作ろうと考えていましたが、最終的には九〇万円近い高額の支援を集めることができました。なお前述の「もろたけ歴史通信」は月に二回を配信しています。Googleで「もろたけ じゃんばん」と検索してみてください。

そして、二〇一九年十二月に『大字誌 両竹』の本が刊行をしました。ブックレット形式にして、比較的、手に取りやすい形にしました【図11】。

5. **なぜ大字誌を編むのか**

最後にまとめをします。事例として、二つの話をしました。防災集団移転促進事業の地区である請戸や、復興記念公園によって地区自体が消滅してしまうような両竹。今日の話には出していないが、両竹の南側には放射性廃棄物の中間貯蔵施

設もできています。その中で、破壊される地域の歴史と、記録をどのように継承をしていくかの実践を歴史研究者として今、行っています。

問題は、なんで当該地区の大字のレベルに着目をして、歴史と記憶を継承する必要があるのかということでしょう。先ほども冒頭に出てきましたが、現在の復興は、どうしても国家主導の創造的復興です。地域や、コミュニティの復興に結び付いていないのではないかとこの批判は、社会学などでは非常に盛んにいわれています。他方、例えば双葉町の場合は、「双葉町復興まちづくり計画（第二次）」など復興計画の初発段階から現在に至るまで「双葉町の歴史・伝統・文化の記録と伝承」を柱に掲げています。また、大熊町の場合、「大熊町第二次復興計画改訂版」などにおいて「大熊のDNAを残し、新しい文化を紡ぐため」「ふるさとの歴史を伝えるための記録の保管と活用」を重点施策に掲げています。

以上のことを考えると、帰還困難区域などの地域におけるコミュニティの復興には、地域の歴史と文化の継承が不可欠です。そのためにも大字のレベルで、ちゃんと後付けをしていく必要があるのではないかと考えています。

笑顔の向こうがわ

——保養キャンプで出会った母子の日常にある矛盾と不安

吉田 智彦（写真家）

鹿目 久美（母ちゃんず・福島からの避難者）

※「笑顔の向こうがわ」は、対談形式で行なわれました。

1. 保養キャンプとは

吉田 よろしくお願ひします。普段は、雑誌や書籍の写真を撮ることや、文章を書くことをしている吉田智彦です。

鹿目 私は、福島からの母子の避難者です。当時、四歳の娘を連れて、こちらに母子避難をしています。これから話をする先生や西村先生とは違って素人なので、話すのはあまりうまくありませんが、よろしくお願ひします。

吉田 鹿目さんが入っている母ちゃんずは、神奈川県相模原に住むお母さんたちが立ち上げたボランティア団体で、神奈川県相模原や東京都の町田で保養キャンプを行っています。

まず、保養キャンプとは何か。手元にある資料にも書いてありますが、福島第一原子力発電所の事故があつて、放射能が漏れました。高濃度の放射能汚染を受けてしまった場所に住む人たちは、その後、放射線量が下がって低線量になつても、長期間被ばくし続けていると将来、健康被害を受

ける可能性があります。断続的でも年間一カ月ぐらいは放射線量の低い所に行って過ごすことで、体の中のためこんだ放射能物質を吐き出すことが望ましいといわれています。チェルノブイリの事故でも、保養キャンプが行われ、今でも続けられているのはそのためです。

母ちゃんずは、震災の翌年の二〇一二年から福島のお母さんと、放射能汚染の影響を受けやすい小学生以下の子どもたちを対象にしたキャンプを行っています。最近では、今年の夏に行いました。それで十九回目を迎えて、延べ八〇〇人以上の人たちが参加しています。

鹿目 この活動は、私たちだけではなく、全国各地で受け入れをしています。先ほどチェルノブイリと言っていました、チェルノブイリ法で定められています。ウクライナとベラルーシでは、年間一ミリシーベルト以上ある所の子どもたちは、年に一度の保養所への旅行券が配布され保養に出ることが保証をされています。知つてのとおり、日本では放射能の影響がないといわれていて、国主導ではしていないので、各地で任意の団体が活動をしています。私たちも寄付のみでお金を集めて、ボランティアで行っています。

吉田 僕の周りの人たちは、福島に関しては「もう大丈夫ではないか」と言う人も多いです。避難解除がされている所もあるし、線量が以前より下がっているところが多いこともあって、「もう大丈夫なんだろう」と考えている人も多いのではないのでしょうか。ウェブサイトで、「みんなのデータサイト」といわれるものがあります。本当は国がするべきことだと思いますが、これは全国各地の放射能汚染を市民団体が調べているものです。全国から無作為に土を取り寄せて、線量を測っているのです。

僕は、母ちゃんずの保養キャンプで、福島から参加しているお母さんと子どもたちの写真を撮

って、ご本人たちに差し上げる活動をしています。参加者の何人かが住んでいる、福島市の今年のデータをみると、平野部の誰でも行ける場所でも、九〇〇〇ベクレル (Bq/kg) を超える所があります。汚染土の定義は、八〇〇〇ベクレル以上のもたとされて、九〇〇〇ベクレルは高い数値です。いわき市でも一万三〇〇〇ベクレルを超えている所があります。福島の人たちは、住んでいて大丈夫といわれている所でも、線量の高い所がまだらにホットスポットとして残っている中で暮らしています。そのような所に住んでいて、わが子が健康被害を受けないかを心配しているから、保養キャンプに参加しているわけです。

鹿目 数字では分かりづらいかもしれませんが、震災前の原子力発電所の事故が起こる前は、一〇〇ベクレル以上の汚染のあるものは特別な処理をしなければなりませんでした。それが震災後は、八〇〇〇ベクレルに引き上げられました。土壌の汚染で八〇〇〇ベクレルは、田んぼで稲の植え付けが、できるか、できないかの基準を超えていて、震災直後には五〇〇〇ベクレル以上は、植えてはいけないことになっていました。それ以上の汚染が今でもあり、確実に汚染が高い所もあります。母親としては、子どもをその土地で遊ばせることや、その土地で作ったものを口に入れさせることは、すごく怖いのです。そういう不安を取り除くために全国で保養活動があつて、そこに来る親子の方たちは、まだまだだいるわけです。

2. 保養キャンプと写真展

吉田 今回、僕が保養キャンプで撮影した写真を大学のエントランスで展示させてもらっていますが、それらをスライドにした動画もあるので、スクリーンでご覧いただきながらお話しします。



まず、私がないで保養キャンプの写真を撮るようになったのかをお話しします。

震災が起きたときは東京に住んでいて、何か自分でできることはないかと、もんもんしながら、何もできないでいました。そんな時、二〇一二年に母ちゃんずの保養キャンプに雑誌の取材で行きました。僕も、それまで保養キャンプの存在自体を知りませんでした。そこで一〇人足らずの母ちゃんずのメンバーが、福島のお母さんと子どもたちを守らなければならないとの思いで、保養キャンプを立ち上げていました。

取材をしながら、ここだったら自分一人で通えるし、保養キャンプに来た方がいい思い出になるような写真を撮って差し上げることができれば、僕も少しはみなさんの役に立てるかも知れないと感じ、二回目以降は個人的に撮影を続けています。(写真を) 覧いただけると分かるように、皆さんは本当にいい表情で写ってくれます。それはなぜか。

これらの写真は、もともと第三者に見せるために撮っているわけではありません。写っている方々は、全て自分のものであるとの思いで、写っているからこそ、純粋に、正直に、いい笑顔で写ってくれるのだと思います。撮っているとき、本当に元気な子は、最初から元気に騒いでいますけど、ほとんどの子は、お母さんがはしゃいでいるのを見てほっとすること、はじめていい表情になります。子どもたちは、親のことをよく見ているなあと感じました。本当に朗らかに写ってくれるので、撮り手としてもうれしいです。

キャンプが終わった後に母ちゃんずが報告書を作っているのですが、参加したお母さんたちに感想文を書いてもらっています。資料にも二つほど載せているので、後で見てください。

キャンプに来ているご本人たちと話をしたり、感想文を読んだりしていると、笑顔とは対照的に、福島での生活に悩みを抱えながら苦しんでいる様子がひしひしと伝わってきます。五年、六年、七年と撮影をつづけているうちに、僕の中で、その笑顔と実情のギャップが大きくなっていききました。それに加えて、僕の周りでは、いまだに保養キャンプを知らない人や、福島のことを気にしていない人、もう大丈夫と考えている人が多いことにも、大きなギャップを感じてきました。そんな中、二〇一七年の十一月にとうとう僕は黙っていられなくなって、保養キャンプや福島の実情を知らない人たちに伝えようと、母ちゃんず経由で参加者一人一人に連絡を取って、写真を展示させてもらう許可をいただいたのです。

最初は池袋で、去年（二〇一八年）の三月十一日から展示を始めました。そのときは、やむにやまれぬ思いで始めて、何回するか考えも何もありませんでした。ですが、実際にやってみると、開催をするごとにいろいろなお話をもらって展示が続き、今はここで十三回目をさせてもらっています。

3. 母ちゃんずの立ち上げ

吉田 鹿目さんから、母ちゃんずの保養キャンプがどのように始まったかについて話をしてもらいます。

鹿目 先ほどチェルノブイリ法の話をしました。二〇一一年の夏から任意団体が各地で保養キャン

プを行い始めました。母ちゃんずの周辺では、八王子のグループで、まずは保養キャンプをするとの話が出ました。そのスタッフと、今の母ちゃんずの代表が友達で、「私たちも何かできることがないか」とのことで、同じ幼稚園に子どもを通わせていたお母さんである一〇名がスタッフになって、手弁当で始めました。いざやることを決めたときは、場所もバスも確保をしていなく、どうしようといったところから始まりました。

私たちは相模原で行っていますが、他の団体の所にボランティアへ行って、ノウハウを聞いて始めました。その幼稚園は、外遊びの幼稚園でした。母ちゃんずの代表は、関東も汚染をされていたので、原発事故後は子どもたちを外で遊ばせるのが怖くて、幼稚園に行かせられなかったとのことです。あるとき、怖がっているだけではしょうがないので、ガイガーカウンターを買って、活動の場所である相模原市内を測りました。結果は、相模原だったら気を付けながらだったら大丈夫だと感じたそうです。

自分の子どもをやっと外に出し始めて、そのときに、ふと自分もこんなに不安なのに、福島のお母さんたちはどのような思いをしているのだろうかと感じ何か出来ることはないかと考え始めたと言います。他の団体が保養キャンプを始めたので、自分たちもできるのではないかと始めました。お金も人脈もありません。スタートをする時点では、全くお金もないのに施設とバスの予約をして、ゴーサインを出してから、一〇人が集まって寄付を募り始めました。

吉田 福島の人に来てもらうのかもゼロだったわけですよ。そこはどうしましたか。

鹿目 私はそのときに、まだその幼稚園に娘を入れていませんでした。震災はちょうど幼稚園に入る年でしたが、避難をしてすぐは、知らない土地で幼稚園に行きたくないと娘が言うので、行かせ

ていませんでした。たまたま私の近所の人が、保養キャンプをするスタッフの中に入っていました。「今度、福島に関わる活動を始めるので話を聞きにきてくれないか」と声を掛けてもらったことがきっかけで、私はスタッフになりました。そのときに、ある保養に参加したお母さんが、「そんなに心配ならんで避難をしないのか」と言われて、傷つくお母さんたちがたくさんいたという話をしました。せめて私たち母ちゃんずの保養キャンプに来る人たちは、傷ついて帰ってほしくないという思いがあつて、母ちゃんずに加わりました。みんなは福島につながりがなかったもので、まずは私の友達から声を掛けて、あとはインターネットで募集をして、参加者を募りました。

4. 最初の保養キャンプでの経験

吉田 僕は最初、取材でキャンプにお邪魔したわけですが、第一回目ときは受け入れ側のみんなも、本当に緊張していて、がちがちでしたね。あれから十九回と回を重ねて、最初の頃と今とで変わってきたことはありますか。

鹿目 今、すごく緊張をしていたと言いましたが、他のスタッフのお母さんたちは、被災をした人たちと直接、関わったことがあります。私も含めてスタッフは、何か余計なことを言って、傷つけてはならない。私たちはどう接しているのか、何を話したらいいかもわからずおろおろしていました。保養を始めた当初は、参加者の方に対して上げ膳据え膳といいますか、何かこぼしたらすぐに拭きに行ったり、何に對しても手を差し伸べて、こちらが全てしてあげるといった姿勢でした。そうやって続けていくうちに無料で受け入れをしていることもあつて、回を重ねるごとに来るお母さんたちが、何もかもしてもらおうことに申し訳ない気持ちになつてしまうことがあつたようです。

全て周りのことをしてもらうのは落ち着かないし、きっと後ろめたいという気持ちになったのかも
しれません。

そこはだんだんと、みんなと一緒につくるキャンプにしたいと思うようになり、参加者のお母さんたちに食事の片付けなど手伝ってもらうようになりました。スタッフの子どもも一緒にキャンプに参加しています。始めた当初は一番小さい子だと二歳で、その子や人によつては三人の子どもを連れて、五泊六日のキャンプを運営していました。朝におむつを替えて、夕方まで替えてあげなかった子がいるぐらいスタッフは走り回っていたので、そこは参加者のお母さんたちに手伝ってもらったこともあり、今は協力関係を築けるようになりました。参加者にイベントの案を出してやってもらったり、一緒にご飯の準備や片付けをするようになって、一緒に子どもたちを守るといいますか、育て、見守っていくような、いい関係になっています。

吉田 最初のキャンプが終わって、参加者たちを見送るときには泣いていましたね。あれはなぜですか。

鹿目 私はこの話をするとすぐに泣いてしまうので、あんまり話たくありませんが……。震災当時、私が住んでいた場所は、原子力発電所から六〇キロメートルぐらい離れていたのですが、避難区域ではありませんでした。自分で判断して避難をした自主避難だったのですが、避難をする必要もないのに勝手に避難をした人と言われることがありました。それでも私の近くでは、五〇〇〇ペクレル以上の田んぼが見つかって、作付け制限があったぐらい汚染がされていたので、私は不安で避難をしましたが、でも本来であれば、福島でみんなと支え合って、復興に向かって頑張っていかなければならぬのではという気持ちもありました。福島を心配だと思って避難した私を、心配だけど福島に住む



選択をしなくてはならなかった福島のお母さんたちは、私の存在をどう感じるのだろうか？ と受け入れるときは、すごくどきどきしました。

でも来てくれたお母さんたちは、原子力発電所の事故の影響を受けて、放射能のことも怖いと感じ、子どもを守りたいといった同じ思いのお母さんとして、私を仲間として認めてくれました。そんなみんなが福島に帰るときには、私が危険だからと感じて出てきた場所に、仲良くなった親子を送り返すことがすごく心苦しかったです。本来であれば、私はあのバスに乗っている側だったかもしれないのに感じたときに、自分だけが安全と思われる場所に身を置いていることがすごくつらくて、心苦しかったです。涙も出ました。その頃は、避難生活の中で苦しい思いをして、うつで薬を飲みながらスタッフをしていました。そんな状態だったのでみんなを見送った後に過呼吸になって、どうしようもない辛い思いをしたのを覚えています。

吉田 僕は震災が起きて、原子力発電所の事故が起きたときに感じたのが、「福島はもう住めない土地になってしまったのではないか」「どんなことがあっても、逃げたほうがいいのではないか」ということでした。しかし、保養キャンプに通ううちに、写真に写ってくれているお母さんたちの家にお邪魔するようになり、現地で撮影や、話を聞かせてもらっていると、一人一人に止むに止まれぬ事情があることを知りました。

例えば、お子さんが発達障害の方です。これからどのように人生を組み立てていったらいいのかを親として一生懸命に考えて、その子がようやく学校に行った。ここだったら通いやすいし、良い

先生もいて、しっかりと成長をしてくれるに違いないとめどがついた矢先に、3・11の震災が起きてしまった。ようやく家族で幸せに生活をしていける土壌が整ったところに震災が発生をしてしまったのです。リスクがあると分かっている、経済的にも人間関係的にも生活基盤のない他の土地に行って、またそうした環境をゼロから築き上げることでできるかと考えたら、どうしても動けなかつたとお父さんが話してくれました。

他にも、自分は子どもの健康が心配で動きたいけれども、旦那さんは仕事の都合で、また近くに住む旦那さんの両親がどうしても動きたがらない。なすすべもなくいたところに保養キャンプというものがあると知り、参加しているというお母さんもらつしやいます。

本当にひとりひとり違うさまざまな理由で動けない人たちが、いっぱいいます。そうした人たちの声は、放射線量が低い他の地域で暮らす人たちのところにはほとんど届いてこないのが現状です。

5. 経験を語ることの難しさ

吉田 鹿目さんは、母ちゃんずの活動とは別に、今日のような場で自身の体験を話していますが、その活動をはじめたいきさつはなんですか。

鹿目 私は避難するまでの四か月間を福島にいたこともあって、震災当初の福島の状況も知っていたし、福島の外に出て、こちらで福島の話がどのように伝わっているかもわかっていました。そして全く現実が伝わっていないと感じていたときに、福島のことを話してくれないかとまたま言われたのがきっかけでした。人前で話すことはそれまでなかったのですが、どきどきしながらも自分の経験したことや、そのとき感じていたこと、どのような不安があったかを話しました。そこにいた人

にまた自分の生活している地域で話をしてほしいと依頼をされるようになって、頼まれたら出来る限り断らずにお話をしてきました。

先ほど西村先生から、ここは〇・〇四マイクロシーベルトとの話がありましたが、福島も原子力発電所の事故の前はそのぐらいの数値でした。事故後に私の住んでいる所は一瞬、その五〇〇倍ぐらいの数字になりました。娘の身に何かある可能性があるかもしれない。ここにいたら、この子は事故前の一生分の被ばくを一年間でしてしまうかもしれない。それによって、事故がなければならなくてよかったかもしれない病気にかかってしまうのではと考えたときに、すごく不安になりました。先が見えなくなったり、避難をした後も自分が一月先や三ヶ月先、一年先に何をしているのかも見通せなくなったり、本当に絶望感に襲われました。自分のことはまだしも、娘にもそんな思いをさせてしまうことがとても怖かったです。

そんな思いをするのは、私だけで十分であると感じました。忘れ去られないように自身の体験を伝えていって、原子力発電所の影響を受けた子どもたちの未来をみんなを守るために続けていかなければならないとの思いが一番でした。今、娘は中学一年生になりました。一時期は伝えることもつらかったし、自分のつらい思いを思ひ出さなければならぬので、私が迷ったときに、「やめてもいい」と言ってくれました。その時娘にもし震災の話をするしたら何を伝えたいかと聞いたら彼女も同じように忘れてほしくないと言いました。そして「自分の身に起こったことを、みんなに同じ思いをしてもらいたくないから知っていてほしい」と言ってもらいました。その時にこの子と、他の子どもたちのためにも続けていかなければならないと感じて、今も何とか続けています。

吉田

鹿目さんとこれまで何回か一緒に話させてもらっていますが、話をしていること自体がすらく

なることもあるのではないかと思うのですが、いかがですか。

鹿目 つらくなるときですか。あのときの混乱は、今でも思いたすと動悸がします。地震の起きた時にいた場所を通るときは、いまだに動悸がして身体が震えます。確実に震災前の生活が奪われました。わが家はログハウスを建てて、まきストーブを入れていました。自然に優しい生活をしたいくて、自分が望んだ場所に望んだ家を建てて、そこに骨を埋めるつもりでした。事故が起きてそこが安全ではないと感じたときに、望んでいた生活の全てが奪われて、想定していた人生から変わってしまったことがとても苦しいです。今は主人が住んでいます。以前はいつ帰って来てもいいように家を整えてくれていましたがある時期からそれを諦めたのではないかと思えます。それを境に家の空気もとても変わってしまった。家に帰っても自分の家ではないと感じて、すごくむなししい思いをしています。

その土地が好きで、その土地をすごく愛していたのに奪われてしまった。この土地で描いていた夢までも奪われてしまった。本当のつらい部分は、まだ誰にも話せていないだろうと感じています。今でもつらいし、そこを掘り出すことは難しいと感じます。自分が生きたかった生き方ができなくなる。住みたかった場所から去らなければならなかった。私は自主避難なので自分で選んでいるわけですが、原子力発電所の事故がなければ、そこで生活していたはず。それが奪われたことが一番つらいし、避難区域だった人たちは、強制的に避難させられているので、もっといろいろな思いを抱えていると思うと、とてもつらいし複雑な思いです。

6. 将来の展望

吉田 これからは、どのように活動をしていきたいですか。

鹿目 私ができることを続けていくしかないと感じています。思いに寄り添うと簡単に言いますが、それを実現するのは簡単ではないと思っています。でもそのつらい思いをしている人たちが大切にしていたものを一緒に感じて形に残している方たちがいるのを、登壇者の先生たちも含めてたくさんいることを知りました。外からただ見ているだけではなく、先生がたは共有をしています。先ほど西村先生が共有をして、持続をずっとしていました。その言葉に私は、強く共感を覚えました。一緒に共有をして、体感をして、それを持続していくことは、つらい思いをした私たちにとっては一番の励みになります。私の大切にしていくものを一緒に大切に思ってくれる人が継続をしてそばにいてくれる、時に一緒に歩んでくれることは、一番の力になるのではないかと感じるので、それを私は私なりに続けていけたらと考えています。

吉田 いろいろと話をされていて、相手はよかれと思つてしたことでも、鹿目さんからするといいこととは限らないといえますか、寄り添ってくれることにはならないといった体験もされていますか。

鹿目 たくさんしています。今日は福島の話で、私は母の立場で話をしていますが、これが原子力発電所の事故の作業員さんや東京電力の方、農家の方では、また違った話が出てきます。その人のそのままを受け止めることが大切だと感じています。言つた言葉を否定されることは、つらいことです。自分と違う思いでもいったんは受け入れてもらおうと、感じ方は違う気がします。相手の方が私のためを思つて言ってくれる言葉など、自分の想いと違う時があつても想いを受け止めようとする

努力はしますが、傷つくときは多々あります。こちらからみる正義でも、相手側からはそう感じられないこともありますし、そういう時には戸惑うことも多いです。

吉田 確かに、立場が違えば、考える「正しいこと」も違ってきますね。そんな中で、僕のように当時は東京にいた人間からすると、どのように福島の人たちと接していいかが分からない人も、いっぱいいます。現に母ちゃんずの代表の竹内さんは、参加をしてくれたお母さんの神経を逆なでしてしまうような質問を無意識にしてしまって、「あなたは私たち福島のお母さんのことは理解できない」と言われてしまったことがあるそうです。竹内さんは、それで、一時期、すごく悩みましたですが、最終的には「本当の意味では理解できないかもしれないけれども、私は福島のお母さんと子どもたちを守りたいから保養キャンプを続ける」と割り切って、「一生続ける」と言い切って、行っています。

触るのが怖いという気持ちもあると思いますが、僕の場合は、役に立ちたい、寄り添いたいという気持ちを写真で何とか伝えようとしています。してあげるという上から目線ではなく、自分がやりたいと思う気持ちから動いている感じです。

福島のために特別に何かをしななければならないと思う必要はないと思います。ただ、原発の事故によって今も苦しんでいる人たちがいる事実をちゃんと知って、認識をしておくことが大切です。その姿と生の声を知っておくことは、これから自分で何かを選択をするときに必ず大きな指標になります。僕は僕で、写真でできることを続けていきたいと思っています。ご静聴、ありがとうございます。いきました。

鹿目 ありがとうございます。



図1：2019年11月27日『河北新報』夕刊

『更地の向こう側』の記憶地図

— 気仙沼市唐桑町宿での試みから

植田 今日子（上智大学）

1. 津波を伝える

上智大学の植田今日子です。今日は、『更地の向こう側』の記憶地図』というテーマで、（宮城県）気仙沼市唐桑町宿を舞台とした試みについてお話します。

最初に関係のない話をしますが、東北というのは割と寒い所で、かつては飢饉もあった場所です。災害と繰り返し付き合ってきたような場所といってもいいです。そこをずっと定点観測してきた媒体として、河北新報といわれる、宮城県で一番読まれている新聞があります。

少し前にさすが河北新報であると感じた紙面がありました（二〇一九年十一月二十七日夕刊：図1参照）。最近、女川（原発の）二号機が合格をして、



図2：三陸の主な津波の年表

再稼働に向けて前進をしたとのニュースと、ローマ教皇が日本に来たときに、原爆の犠牲者の追悼だけでなく核エネルギーを使うことに対して、批判をしていたというニュースがありました。それが同じ一面に大きく打ち出してあって、いい新聞だなあと感じました。

この「河北新報」といわれる紙名自体は、白河関に由来しています。なぜ河北新報かといいますと、東北は「白河以北一山百文」と、白河関よりも北の山は百文の価値しかないといわれていたといえます。その東北を蔑む言葉、「河北」を紙名としてあえて名乗るといいますか、そのような粋な名前を持っているわけです。ずっと東北に張り付いて、報道をされてきた媒体であるということができません。

この新聞が繰り返し報じてきたこととして、津波があります。「この年表は何でしょうか」(図2参照)と、よく授業で学生に聞きます。私は二〇一〇年から二〇一五年度までの六年間、仙台市にある私立大学の東北学院大学というところに勤めていました。そのときの学生は、この年表を見せると何の年表かすぐに分かりましたが、東京で学生に聞くと「二〇一一年があるから地震ですか」、といった反応が返ってきます。

これは三陸で非常に大きな津波があった年を示している年表です。この間を考えると、繰り返し津波がきているとはいいますが、三〇から五〇年の年数を挟んでいます。繰り返しといっても、人の一生を考えるとそんなに頻繁ともいえないといえますか、どう伝えていけばいいのかというと、結構、難しいと気付かされます。



図4：唐桑町宿浦の位置

Google map より転載 / accessed on 20131018



図3：気仙沼市の位置

2. 津波常習地としての三陸

宿浦との出会い

今日お話しするのは気仙沼市で、仙台からだいぶ北の方に行った所です（図3参照）。陸前高田市は岩手県ですので、すぐ北に県境が位置する所で、私は唐桑半島といわれる所にしばらく通っていました。

その中でも、この付け根の入り組んだ所にある宿といわれる集落で、今日お話しする取り組みを行いました（図4参照）。私が宿浦に初めて行ったのは、二〇一一年の五月です。私が仙台市の大学に着任したのは二〇一〇年で、その約一年後に震災が起きました。それまで私が所属をしていた学科の学生たちが実習するのに、大変お世話になっていた場所でした。社会学の佐久間政広先生が実習でお世話になっていた所だったので、その縁で当初は私もお見舞いにくっついて行っていました。六十二軒あったうちの五十四軒が津波で流出して、ここで結果的に、『更地の向こう側』という名前の絵地図のある生活史の書籍をつくることになりました（図5参照）。

普通の調査と違ったのは、メンバーの専門がバラバラということでした。フランス語学の先生や金融経済の先生、中世史の先生、社会福祉学の先生、文化人類学の先生がいて、普段は全く現場でヒアリング

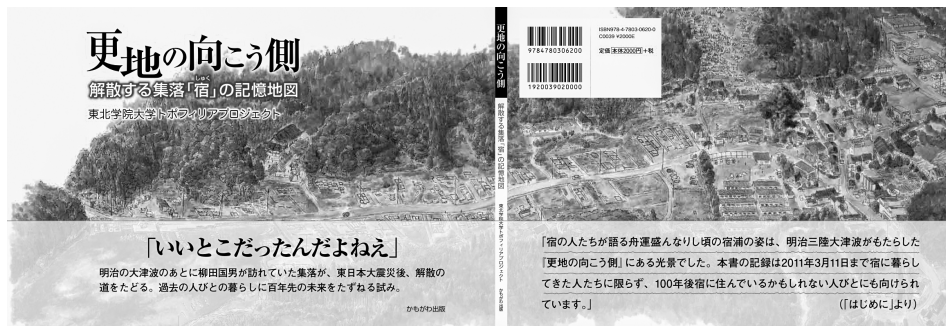


図5：書籍（2013）『更地の向こう側』かもがわ出版



図6：被災後の宿浦の航空写真

Google earth より転載／accessed on 20131018



図7：2012年時点の宿浦(2012年3月20日報告者撮影)

をするような学問をしていない先生もたくさんいました。いつもの調査と違っていたのはそれだけでなく、私が初めて訪問をしたとき、ここは更地だったわけです。これは当時のGoogleアースで集落を上から見た写真ですが、家が姿を消していた状況でした（図6参照）。人間の目線から見ると、このような状況がありました（図7参照）。

まさに、更地になってしまっていたわけです。

いろいろな専門の教員と、そこに暮らしていた人たちとの間で、まずは不在になってしまっているものを絵にしていく作業が始まっていきました。これもいつもの私の調査と違っていたところで、絵を描く役割の人としてイラストレーターの綱本武雄さんと一緒に歩みました。今日のポスターでも使ってもらっている絵を描かれた方です。その方を連れて、家並みを描くために必要な情報の聞き取りをしながらの調査になりました。話を聞いていると、皆さんが日常的に会話の中で、明治のときは、昭和のときは、チリ（地震津波）のときはと、過去の津波を言い分けておられて、当たり前のように昔の津波が語られることにとっても驚きました。

三陸の津波を描いた研究者

三陸沿岸の津波の歴史を見ると、今回の3・11のときに被害者の一番多い津波だったのではないかと思ってしまうますが、実は明治三陸（大津波）のときの方が犠牲者の数は大きかったと記録にあります。津波の被害のある地域で暮らしてきた人たちを考える上で、避けて通れないのが山口弥一郎の『津波と村』という本です。山口弥一郎は昭和八年の津波以降、ずっと被災地の集落を文字通り歩いていました。

その文章の中で、強く心に残った一文があります。「津波は海岸に近づくに従って高さを増し、特に三陸海岸のごとき鋸歯状の海岸では湾頭のみ甚だしく波高を大にし、猛威を逞しゅうするのである。常日頃はそこがまた良い船着場であり最も生活に便利な村の位置であるのだから困ったものである」
と書いています。津波が来たときにものすごく大変な場所は、普段はとてつもない入り江といえますか、

西暦	津波	被害
1896	明治三陸	波高 2.2m / 流失家屋 19 / 死者 36 名 流失前家屋 27 / 被災前人口 175 名
1933	昭和三陸	波高 1.3m / 流失家屋 29 / 死者 4 名
1960	チリ津波	死者なし
2010	チリ津波	死者なし
2011	平成津波	波高 14+m / 流失家屋 54 / 死者 6 名

図9：宿浦の津波被害

西暦	日付	被害
1896	0615	明治三陸大津波 死者 845 名
1933	0303	昭和三陸大津波 死者 60 名 / 船 417 艘
1960	0524	チリ地震津波
2010	0228	チリ地震津波
2011	0311	東日本大震災 死者 105 名

図8：唐桑半島の津波被害

いずれも内務大臣官房都市計画課（1934）『三陸津浪に因る被害町村の復興計画報告』より作成

静かな集落なのです。船を着けたり、（カキやホタテの）いかだを浮かべたりするのにとてもいい場所で、津波が来たときには相反する性格を持った場所、そういうところに皆さんの暮らしが築かれてきたことが分かります。

実際に唐桑半島に近づいてみると、私がこれから話をする宿浦は、半島の一番奥にあります。三陸沿岸ではこのような入り組んだ所に、集落が発達してきた歴史を持っています。これは唐桑半島の被害状況（図8参照）です。さらに集落単位で調査をされたものを見ると、宿で犠牲になった方はこのように確認ができます（図9参照）。民俗学者の柳田国男も明治三陸大津波の後に宿浦に来ていました。そのことが「二十五箇年後」（『雪国の春』所収）といわれる文章の中で、この宿では、四十戸足らずの中、ただの一戸だけ残って、他はことごとくあの津波でつぶれたと書かれています。柳田が言っている一戸だけ残ったというのは、実際の記録とは食い違っています。

柳田は唐桑には短期間しか行っていないのですが、柳田の目線にはっとさせられるのは、「結局村落の形は元のごとく、人の数も海嘯の前よりはずつと多い。一人一人の不幸を度外に置けば、疵はすでに、まったく癒えていない」といつている部分です。津波がきた後の村落は、人がまた増えてきて、魚を取っているといいますか、あつさりしたものであるという部分を見えます。単に批判的な目線を持つのではなく、あれほどの津波がきても海を離れられないものだ、という彼の人間観が、ここに見て取れると思います。



図11：震災犠牲者の百箇日の供養の日に執り行われた御施餓鬼供養
(2011年6月19日唐桑町地福寺にて報告者撮影)



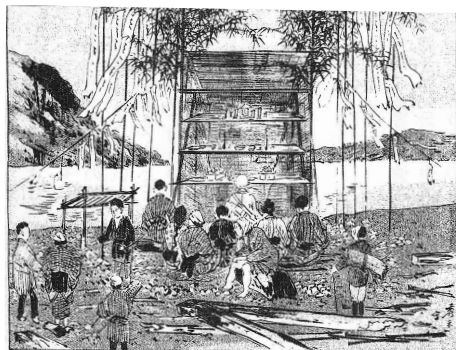
図10：唐桑半島に建つ海之殉難者慰霊碑

3. 記録する者の眼差し

海難史を描く

この唐桑で話を聞いていて、唐桑の人たちが津波だけではなく、海難全体とどのように付き合ってきたかを素朴に知りたくなくなりました。漁村なので、海難事故に遭って亡くられる方もたくさんいた歴史があります。この写真は、海で亡くなった方を供養するための塔です(図10参照)。津波がきても海を離れない人たちが柳田が見ようとしたように、唐桑の人たちが様々な海難とどのように生きてきたのかを知りたくなくなりました。これは人類学や民俗学では、災害文化といわれるカテゴリーに入ってくるものです。このプロジェクトで目指すことも、津波で失われたものの探究をするよりも、海難とともに暮らしてきた人たちの歴史や、文化の探究をすることにしました。

なくなってしまった元のものや、一生懸命、精巧に作り上げたり絵に描いたりするのではなく、海難と生きるどのような暮らしがあったのかを記録にしようと歩んできました。例えば、象徴的なこととしては、これは二〇一一年の六月十九日に宿浦にあるお寺の地福寺で、お施餓鬼棚といわれるものをつくって供えている写真です(図11参照)。ここ(施餓鬼棚)にお菓子などの供え物があります。これは3・11で犠



〈溺死者追弔法会の図〉
 (『風俗画報 大海嘯被害録下巻』より)

図13：明治三陸大津波の際の溺死者追弔法会の図
 (吉村昭『三陸海岸大津波』文春文庫より)

うことをせずに出港や漁をすることは、海難事故に遭ったり、大漁ができなくなってしまうたりすると伝えられてきたからです。供養も祓いもせずに出漁、出航するのは禁忌でした。

図13は明治の大津波で、追弔法会の図として記録に伝わる棚です(図13参照)。これと非常によく似たものが(二〇一年)六月十九日にも建てられました。これは半島の皆さんが集まって、一カ所の浜で代理的に祓うということをしています(図14参照)。本来は半島の内湾で内側の浜から順に外側に向けて祓っていくのですが、まだ港が壊れていて、道路状



図12：海難で亡くなった人に供えられてきた真水(たらいの中)

(2011年6月19日唐桑長地福寺にて報告者撮影)

性になった方の為の棚でしたが、昔海難で亡くなられた方も一緒に供養をしています。それがよく分かるものとして、この施餓鬼棚の下にたらいが入っていて、あるものをお供えしています。たらいに入っているのは真水です(図12参照)。

海の水を飲んで亡くなっていく方に対して、真水を供えているわけです。海難事故で亡くなった方や、津波で亡くなった方をずっと弔ってきた歴史を持つ場所であることを伝えてくれます。同時に、亡くなった方を呼び出すわけですから、お寺で供養をした後、今度は神社で海を祓う儀礼が行われます。これは同じ日にタツチ交代といった形で、早

馬神社が行うものです。それはどうしてかといいますと、祓



図15：早馬神社の宮司が祓う浜
(2011年6月19日気仙沼市唐桑町北古館浜にて報告者撮影)



図14：半島の14の浜を代表して震災後祓われた浜
(2011年6月19日気仙沼市唐桑町北古館浜にて報告者撮影)



図17：御召船に続く御供船（報告者撮影）



図16：神輿を載せた御召船（報告者撮影）

況があまりよくなかったこともあり、一カ所で海を祓ったわけです。こちらには早馬神社の宮司さんと、跡を継ぐことになった息子さんで（図15参照）、お二人が一緒に祓っている際の写真です。

ここでは例大祭も欠かさずに行われていますが、いつもと違って使えない道もあったので、（神輿を）トラックに乗せて運ぶ場面もありました。そして船に早馬神社の神様を載せます。神輿を載せるお召し船と、先導をするお先船、お供をするお供船が連なっています。ここに出ている船は全て、津波がきたときには沖出しをして助かった船ばかりです（図16・図17参照）。このときは、航海安全と豊漁も祈られます（図18参照）。供養をするだけでなく海で

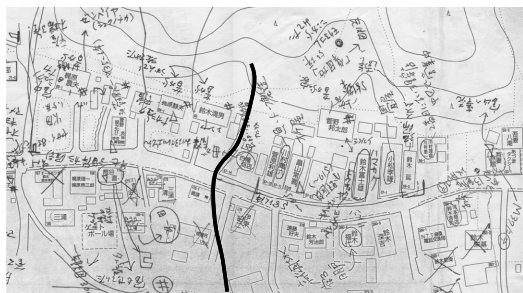


図19：被災前の住宅地図に書き込んだ記録



図18：2011年の海に海上安全と豊漁が祈られた（報告者撮影）

食ってきたことから、漁がまたできるよう、供養と浜の祓いの両方を行いながら海と付き合ってきたことが非常によくわかる祭礼でした。

記憶を地図に

さて、ここで取り組んだことは、聞き取りで遡及できる時間幅で、三枚の絵地図をイラストレーターの方に描いてもらうことでした。私たちの方は、そのために必要な情報を記録していきました。ここで何が頼りになったか。更地になった景観が前に広がっていて、喋ってくださる方も「こんな家があつてね」と無くなつてしまったものを伝えるのは、とても難しいわけですね。そのときに非常に助けになったのが、住宅地図でした（図19参照）。ここに何があつて、ここで何をしたらか、それから屋号など、教えてもらったことを住宅地図に書き入れていきました。それをメンバーで持ち寄って、その情報をまた濃くして、そんな風にして更地での調査を行いました。

例えば真ん中の波線は、昭和八年の津波がここまできたと教えてもらつて書き入れました。

音や匂い

そこで聞こえてきた宿浦の姿ですが、これは村史や字史ではないので、



図21：かつての茅葺きの早馬神社
(網本氏が古い写真からスケッチ)

ましておめでとう」と電報を打っていた時代の話で、遠洋のお父さんが帰ってきた時と、普段の暮らしとはどのように違ったか、といった話も聞きました。

子どもの時、お父さんに会うのが久しぶり過ぎて、恥ずかしくてくつくつくことができなかつたという話や、普段よりおかずが増えたとの話もありました。お母さんたちに聞くと、米が減るのが早くなるとか、水道代が高くなるとか、そんなつれない話も返ってきました。映画のチンドン屋さんが来た話や、ズルをして映画を見せてもらった話なども



図20：現在の早馬神社の社殿
(宮城県神社庁websiteより転載)

普通は載らないようなものを載せたいと考えていました。その一つとして意識したのは、音や匂いです。

これは小学校の匂いがしてきそうな話ですが、昔はお弁当を温める暖飯器といわれるものがあつたといいます。梅干しがアルマイトのお弁当箱に当たつて、よく蓋に穴が空いたという話や、暖飯器でたくあんが温まつて、すごく「いい匂い」がしたなどの話がありました。このようなお話も、是非とも留めようと記録しました。それからここは遠洋漁業の船に乗る方がとても多かつた場所です。宿浦にある唐桑郵便局は、かつては年賀電報の受付数で、日本一になつたことがあつたほのです。これは遠洋に出ているお父さんに、「あけ

聞きました。宿浦らしい話としては、先ほど言った早馬神社です。これは早馬神社のホームページに載っている写真ですが（図20参照）、かつてはかやぶきの姿で、その社屋は気仙沼から移築されてきたとのことです（図21参照）。気仙沼から船で運ばれて、宿浦で組み立てられたとの話も聞きました。

4. 津波を伝える

津波と屋号

宿浦では、津波と津波の間が三〇年ぐらい空いているのですが、その間に移住してきた方や嫁いできた方もいます。津波がくることをどのように伝えてきたかも記録しようと思ったので、どのように伝えられてきたかを一部、紹介します。例えば、これは唐桑町史にあった情報ですが、慶長津波（二六一一年）をどのように伝えていたか。宿浦では、オリとカワラといわれる屋号が付いた家があり遠くない所に道を挟んで建っていました。この屋号は、慶長津波に由来するもので、一つが津波が折り返していった場所だったということでもオリ、もう一つが今でいえば震災のがれきのようなものが積み上がってしまった場所であったということで、カワラとの名前がついていると書かれていました。

先ほど地図で見たように唐桑半島は石浜といわれる半島の外洋に面していますが、実際に3・11のときも外湾から入ってきた津波と内湾からきた津波とが、これらの家の近くで合流しそうになるということが起きました。慶長津波の屋号の話は、本当だったのではないかと言う人が何名もおられました。先ほど言った昭和八年の津波の浸水線として示した線ですが、それがなぜ皆さんに難なく伝えられていたかといいますと、あの浸水線のちょうど上には、「集団地」といわれる復興住宅が建てられていました。そのとき、復興住宅に一番早く移り住んだ人の屋号は、新宿屋といいました。

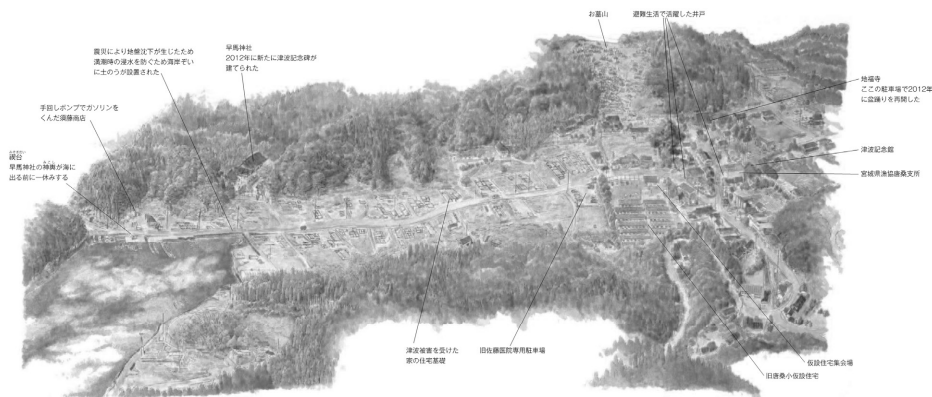


図22：2011年3月11日以降の宿浦（綱本武雄）

この家の主は、カツオ船に乗っていた機関士でした。今も「餌買い」（生き餌のカタクチイワシを特定のカツオ船のために買って確保しておく人）として全国を飛び回っておられるはずですが、昭和八年の津波の後についた屋号が新宿屋だったとのことです。津波がきたことが、絶対に忘れたくても忘れられないような屋号がついていたわけです。

知らないものへの伝え方

津波を知らない人に、津波がどのように伝わっていたのかも、一例として紹介します。これは宿浦の港にあった雑貨屋さんに嫁いだ女性の話です。チリ津波のときには腰ぐらいまで店に泥が入ってきて、かえって（店舗が）流された方が楽だったと、これは問題のある表現かもしれませんが、それぐらい片付けるのが大変であったと、よく義理の母が話していたとのことでした。

津波警報がきて、その女性がのんびりしていると「なーんだ、のんびりして！」と怒られたものだとおられました。津波を知らなかった女性がどのように津波を伝え聞いていたか、よく分かるようなエピソードでした。それからこれは唐桑から気仙沼までの定期船の船長をされていた方のお話です。定期船はバスに

図に、「これから」が含まれるのかについて答えられないといけないと思います。記録とは、失われていくものの救済なのか。学者が出てきて、何か失われるものがあるから、私たちが記録してあげましょうというのは違うだろうと考えていましたが、そうだとしたら何なのか。実際に人類学ではすでに繰り返し批判されてきた構えです。

「近代人類学は文化が変化することをその消滅とみなし、世界各地の消滅しつつある文化を記述し、民族誌のなかに救出することをみずからの使命とした」(Clifford James) ことや、「純粋な文化が外部からの影響で消え去ってしまおうという語り口が、違和感なく受け入れられてきた」(太田好信) ことは、批判的に語られてきました。よくサルベージ人類学といわれますが、なくなったものを救うという姿勢は、ある種上から目線の温情主義的な構えです。それではいけないだろうとの批判



図26：集会所で初めてお披露目された絵地図
(2013年8月24日筆者撮影)

た頃には臨時教室、ある時には裁縫教室になっていたこともあったようです。私で隠れてしまっていますけれども、頭がちよつと見えている方が綱本さんです(図26参照)。

5. 記憶地図を作る意味とは

先学の批判

ではこの取り組みがどのように位置付けられるのかについて、最後に少しお話をして終わりたいと思います。

この書籍『更地の向こう側』には、過去だけでなく、「これから」も含まれていますと書きました。どうして昭和の時代の二枚の絵地

は、既に文化人類学では一般的なものでした。社会学者の有賀喜左衛門も、一部の民俗学に対して批判をしています。

懐古趣味的民俗学は、わずかに残った古俗が消えてしまえば、民俗学が成立をしないように考える。もし生活が変化して、古俗が絶えて、民俗学が不可能になるなら、民俗学など成立をしなくてもよい、と非常に強い言葉で批判しています（「民俗学の本願」より）。サルベージ人類学や懐古趣味的民俗学の構えは違うだろうと（学界でも）長らくたしなめられてきたのです。では私たちが取り組んだ記録がそうではないとしたら、一体何なのか。この宿の人たちの記録が、消滅しつつある文化の救出ではないとしたら何だろうかと、答えられなければいけませんでした。

「集落の可変性の幅」を知る

これはすごく時間が経ってから辿り着いたことですが、この集落の可変性の幅を知るための試みだったのではないかと、今は答えるとしたらそう答えます。

どういうことかといいますと、例えば今、目の前にある宿浦の姿（宿浦A）があるとして、話を聞くことや文献を繰ること、一つ、今と違う姿にたどり着くことができるわけです。かつての宿浦の姿は過去の姿でしかありませんが、それが宿浦Bの姿だったとすると、宿浦Aと異なっている姿であることが分かります。このとき宿浦は今後、どのような形態を取りうるのかについて、少しの幅を持つて理解することができるようになります。これはおそらく歴史学の役割であり、存在理由でもあるかと思いますが、集落が取り得る姿に幅が見えてきます。これはもつと豊かにさかのぼっていったときに、また別の宿浦Cの姿が見えたとしたら、さらに集落には今後、どのような道があるのか、歩んで

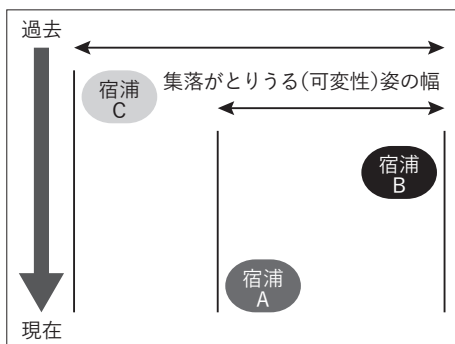


図27：集落の可変性の幅の概念図

きた歴史の射程は広がります（図27参照）。

例えば避難で人がいなくなつて、この集落はもう駄目なのではないかとの絶望的な展望を持つてしまう。今日の福島のお話でも、そのような言葉が発した方が紹介をされてきました。集落がどのような形から存続していけるのかを考えたとき、その可変性の幅を広げることができれば、何かヒントを得ることにつながるのではないかと思います。これは私たちが普段、人物を理解するときと同じではないでしょうか。人が意外な過去を持つていることを知ると、その人を少し深く知つたような気持ちになることがあります。

例えば何とかさんは若い頃にやんちゃをしていて、全く学校に行かなかつたらしいとか、東南アジアを陸路で渡り歩いたらしいとか、そんな話を聞くと、その人を少し深く知つたような気持ちになることがあります。そのような理解の幅を得るといいですか、そんな取り組みの一つではないかと、今は考えています。今後の姿を知ろうとするときのヒントになればいいと願います。私は偉い人をさらに褒めるのは、あんまり好きではないのですが、ローマ教皇（フランシスコ）が来日したとき、私はこの方の話に割と感動したといえますか、すごいと感じて聞いていました。広島や長崎に行つてから、原発や兵器製造の批判をしてきたからです。

被爆地で祈ると同時に、日本がアメリカの核の傘に入つていたり、兵器製造に積極的になりつつある矛盾にも批判をして、バチカンに帰つていきました。聞こえのいいことだけを言つて、帰つていくほうがよっぽど楽でしょうし、好かれるのではないのでしょうか。この方は、アルゼンチンの軍政

期（一九七六一一九八三）に、イエズス会アルゼンチン管区のトップを務めていました。私は、何年か前に公開された映画（「ローマ教皇になる日まで」）を見てそのことを知り、この人は仲間や友人が殺される過酷な時代を生きて、今のような言葉を発していたのかと思いました。いわば教皇のかつての姿の一端を知って、この言葉が出てくるのか、と感じたわけです。普段はうかがい知れない人の過去を知ることが、集落の過去を知ると同じような構図にあるのではないかと、今は思っています。

これからを構想するために

被災地には不可逆な過去といえますか、将来を展望したとき、もう過去には戻れない、という追い詰められた状況がもたらされます。しかし同時に、例えば唐桑半島が津波のたびに経験してきたことは、ある種前近代のような状況に追いやられることです。電話もつながらないし、システム化された水道も電気も止まってしまうし、燃料もなくなる。津波の常習地では繰り返し、いきなり過去に連れ戻されるような状況を経てきたのです。

そこからのように立ち上がっていくのかを考えたとき、かつての姿はもしかしたら豊かなヒントを提供しているかもしれないと考えます。その集落がどのように姿を変えてきたのか、何度も立ち上がってきたからこそ、学べることは小さくないと思います。今回のような取り組みが、これから十分にあり得ることを考えるための一つの小さな参照点になることを願います。非常に時間がかかって、後からつくり出した理由ではありますが、そのような取り組みであったのではないかと今は思っています。ご清聴ありがとうございました。

ふるさとの記憶

——「失われた街」模型復元プロジェクト

槻橋修（神戸大学）

1. 震災復興に取り組みまで

現在の活動

皆さん、こんにちは。神戸大学の槻橋です。私は、東日本大震災の被災地を中心に行っている、記憶の復元プロジェクトの話をします。

まずは簡単な自己紹介ですが、植田先生と逆な感じで、私は震災前の二〇〇九年まで仙台にいました。二〇一〇年の頭に神戸大学に異動をしたので、その一年ぐらいに震災があったわけです。そのときに付き合いのあった気仙沼を中心に学生たちと通って、いろいろと復興の手伝いをする機会が続いています。大学の槻橋研究室は、学部四年生と大学院生の修士の二カ年が主体になっています。

同時に、私は専門が建築デザインなので、建築設計事務所もしています。それもあって、東日本大震災の津波での被災に対して、建築に携わる者としても大きく衝撃を受けました。これは事務所で、震災後にまちづくりを考えながらお手伝いすることになった仕事です。最近、東急電鉄の田園都市線に南町田グランベリーパーク駅がオープンをして、そこに大きな商業施設ができました。鶴間公園

といわれる都市公園から境川までの外構のデザインをする過程で、市民ワークショップをたくさん行いました。昨年十一月からオープンをしているので、東京の方で近くに行った際には、ぜひとも行ってみてください。

街の数だけ世界観がある

私は学生のときに、伝統的な集落の形態論、配置論の調査をしました。これは私が修士のときの論文内容です。日本にある散居村では、離散的に一軒一軒がばらばらになっています。村の形がはっきりと分からないような村の形を幾何学的に定義しようと、離れている家の距離を一軒ずつ測って、どれぐらい離れているか。一軒の家から次の近くの家までは、平均でどのぐらい離れているかを統計で計算をしました。これは富山県の砺波平野といわれる有名な散居村ですが、八メートルぐらい離れています。

例えば奈良盆地にある凝集した環濠集落のような場合は、周りの堀で村の形がはっきりとしています。散居村のような、離散的な配置の場合には、外周は描きませんが、一戸一戸の家は集落として分家などをして、そのときに似たような距離感で離れていきます。それによって、間は田んぼですが、そこによそ者が入ってきたときに環視が可能となり、情報を伝えるための空間が生まれるわけです。伝統的な集落を調査しながら、そこで幾何学的な特性と、共同体の運営の仕方との相関関係を研究しました。

南米のアンデス高地の村や西アフリカのカメルーンの村にも通いました。似ている形をしています。少し違ってきます。その違いや、類似点を分析する研究をしていました。各国の集落調査だけでなく、世界中のいろいろな村や街を見て回ることによって、街の数だけ世界観があることと、その大

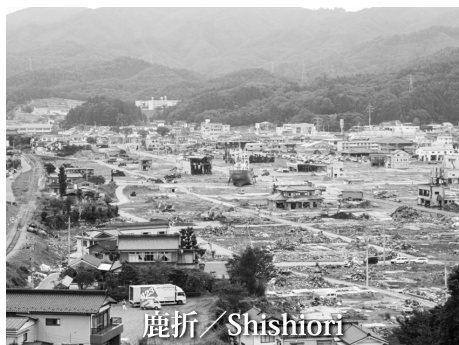


図1：気仙沼市鹿折の被災状況

切さを感じました。

2. 「失われた街」を模型に 建築家に何ができるか

私たちが取り組んだのは、記憶の街というテーマです。私は、ちょうど三月七日に気仙沼に仕事で行っていて、海沿いの業者さんと海を見ながら昼ご飯を食べたときに、津波常襲地域の話もしました。地震や津波がくることは、この地域ではみんなが知っていることでしたが、ここまで大きな津波がくるとは気仙沼や、東北の皆さんは考えていなかったわけです。

図1は気仙沼市の鹿折です。この写真では、船が打ち上げられているのが見えます。残っていたが、れきが、かなり撤去された時期の写真ですが、かつてあった街並みは一瞬にしてなくなっていました。家を造ることや、街をつくることに夢を抱いている立場の人間である私たち建築家や、建築学生は何ができるかと考えたのが、失われた街や村をジオラマ模型で再現をすることでした。

地元の意向を確認する

ただし、それを本当にしてもいいだろうかとの疑問も、学生から挙がりました。二〇一一年五月に、地元の方々の意向を確認するためのヒアリングに行ったときの映像をお見せします。

〔榎橋〕

なくなる前の状態などを模型にすることで、皆さんがこれからどうしていこうかと復興に取り組んでいく際の、足掛かりになるのではないかと考えています。現時点で被災した街並みを復元することは、デリケートなことなので、見たくない人もいるでしょうけれども、ひよっとしたらかつて暮らした地域の思い出になるかもしれないかもしれません。

〔職員〕 なくなった街が……〔涙で言葉にならない〕。非常にありがたいです。非常にありがたいです……。

これはたまたまビデオを回していたのが撮れていたもので、許可をもらって見せています。当時、街並みがなくなつて、ここもあそこも壊れたといった感じで、被災ですごく大変だったとのことですが、すぐ大変な非常時ではあつたわけですが、街を見られないことの喪失感がすごくあつたようです。

この方は、当時の気仙沼市の防災担当だった課長さんですが、街にもう一回、模型でも会いたいと言われていました。それは、われわれのプロジェクトにとっては、すぐ大事なモチベーションになりました。何の予算も付いていないし、したこともないのでどこまでできるか分かりませんが、とにかく行おうと感じました。

3. どのように復元するのか

「大きさ」を決める

縮尺は、五〇〇分の一にしました。一戸建て住宅が多い地域なので、一軒の家を二センチメートル四方ぐらいのキューブにして、お年寄りの方も自分の家が見えるぐらいの大きさにすることにしまし

た。ジオラマ模型の大きさは、一ピクセル一メートル四方です。

とにかくたくさん地域の地域が被災をして、全て作ろうとするとたくさん作らなければならないので、わかりやすくするために、一個の模型を一メートル角にしました。五〇〇分の一の一メートル角なので、一辺が五〇〇×五〇〇メートルのエリアを再現しました。例えば、草履で犬の散歩に出掛けて歩き回るような距離。「界隈」と呼ぶようなエリアを一ピクセルの模型で再現しています。

大きな地域を再現するときには、これらを組み合わせていきます。私たち神戸大学の学生だけではできないので、全国の建築学生に呼び掛けました。一緒に情報共有をしていた建築家の先生や、いろいろな方に声を掛けて、全国の建築学生みんなで、なくなった街を復元する取り組みをしようと試みました。

復元した街の数々

建築の学生は、普段から模型を作ることに対しては、非常にレベルが高く、世界的に見ても日本の学生は、手で模型を作ることがとても上手です。真面目でもあるので、みんな、ひたむきに作業をしてくれました。

岩手県から福島県まで南北に五五〇キロメートルぐらいある東日本大震災の津波の浸水範囲を五〇〇分の一で刻んでいくと、約一〇〇〇個になります。人が住んでいる所に限って計算をしました。すると東日本大震災の被災地では、五〇〇メートル×五〇〇メートルの一ピクセルと呼んでいる模型を約一〇〇〇個作れば、概ね全て作ったことになるとの試算を四月の時点で行いました。一個の模型を作るのに学生が三、四人で、二週間ぐらいかかるので、一〇〇〇個とは大変、途方もない数字だと、当



図2：復元した白模型

時は感じました。

結果的に現在、九年目に差し掛かっていますが、五〇〇ピクセルまで作る機会を得ています。数が大事ではありませんが、継続をして、半分です。一〇年かかっても半分しかできていないとの言い方もできるし、被災の大きさを体感するよきなモジュールとして、自分たちの地点が今、どこなのかを常に意識をするようにしています。

白い模型は、津波の前の航空写真や住宅地図から、模型の図面を起こして、発泡スチロールなどの建築の模型でよく使う材料を使って、作ります。

4. 模型が集合的な想起の空間に 模型の不完全さ

図2のような形になるわけですが、これはすごく不完全な模型であることが、試作をしてみても分かります。例えば、木が生えていません。建物の箱だけ分かるけれども、街並みの目印になるようなものが何なのかは、離れた所でデータから作っている私たちには、ちょっと分からないわけです。地形などは、おおむね分かるので、それを白い模型で再現します。それを地元を持って行って、ヒアリングを兼ねた一週間の色塗りワークショップを行いました。一週間で、色とりどりの模型になります。屋根の色は、皆さんがそれぞれ覚えていた範囲で聞いて、塗りました。駅前広場に時計台があつて、



図3：色塗りWS後の記憶の街

時計台の周りには松の木があったと話も聞かれました。
 図3は南気仙沼駅の周りの模型です。大川の河原には桜並木があって、その桜並木にはちょうちんが付いていました。津波があったときは、ちょうちん花見の直前の時期だったとの話などが模型を囲みながら、皆さんから聞こえてくるわけです。

記憶の街ワークショップ

模型をみんなで作るプロセスに読み替えて、学生と地域の人たちで記憶の街ワークショップを企画しました。模型を囲んで、地域の人と学生がいろいろな話をしながら、思い出の旗を立てていきます。模型を囲んで複数の方が話し始めると、それまで忘れていた思い出も、連鎖的に想起されます。この

模型を通して共同的で、集合的な想起の空間ができるのが興味深かったです。

地域の人たちは最初、模型を見たときには、それがどこなのか分かりません。次第に自分の家や何の場所か分かった瞬間に、模型を見ているのではなく、頭の中に残る記憶の間を見ているといえます。そのエピソードを再現して、語っている状態になるわけです。お客さんがずっといっぱいなわけでもないので、学生たちは空いているときには、山々や道路を塗ります。塗りながら住民の方から、ここに桜の木が咲いていた、ここはお祭りのおみこしが通るルートだったと

いった、白模型にはもともとない情報を与えてもらいます。

思い出の旗

ワークショップ会場の隅に制作場所を設けて、作り込みをします。例えば、これは岩手県田老町の田老中学校のグラウンドで毎年行う、町内別運動会の応援合戦の模様を再現しています。復元模型には季節を問わず日常的なものや、たわいのないもの、その地域の何か愛着に関わる景色を全て表現します。その意味では、歴史的にどの時点を指しているというものではなく、あくまでもいいところを全てオーバーレイをするような模型になっています。地域の方のほとんどは、街への愛着や楽しかったエピソードなどについて話されます。

地域には、当然ながら課題や問題もあつたでしょうが、模型の上には、全てとはいいませんけれども、比較的いい思い出が多く集まる傾向にあります。模型の上に立つプラスチックの旗は、染色をして、色を塗り分けています。これは情報の整理のためです。ブルーの旗は、誰の家や何商店、何神社、何中学といった場所の名前に関するものです。黄色は、ここで娘が成人式の日に写真を撮った、こゝでけんかをして海に飛び込んだ、松林でデートをして、初めて告白をされた所といった街の思い出の場所や、出来事です。当然のことながら震災時の話も出てくるので、それは赤い旗です。

かつて埋め立てる前は海だった所や、昔のゆえんについては紫です。緑色は、例えばマツタケが採れる所や、アイナメが釣れるポイントなど環境についての情報です。模型を囲んで、皆さんは話が止まらなくなるぐらい話をしてくれます。その話してくれた内容は、学生たちがつぶやきシートと呼ぶカードに、書きとります。



図4：記憶の街WS

空間の質がにじむ語り

「つぶやき」は、たわいのない話が多いですが、これらを集めて読んでいくと、この村の空間の質がにじみ出てくるといいますか、浮かび上がってくるような証言の数です。断片的なオーラルヒストリーのような感じですよ。

「つぶやき」のデータは、模型上の場所とひも付けて整理をします。今後、デジタル技術やAR技術などを使って、見られるような形での継承方法を考えていきます。最初は恐る恐る模型を見に来ていましたが、リピーターの方や友達を連れてきてくれる方々たくさんいます。最終的には、一週間でもなり達成感が得られるワークショップになりました。

図4は石巻市のワークショップの模様です。このようにジオラマ模型を囲んで、自分の家がどこかとのぞき込む、非常に簡単な動作からはじまって、思い出を聞いていきます。もうひとつ短めのビデオを見てください。

(町民) ここが駐車場で、ここにござを敷いて、テーブルを出します。

(学生) ござとテーブルですか。

(町民) はい。それで歌を歌うことや、お酒を飲むことをします。通りがかりの人たちを寄って、飲んで、食べていってとみんな、引き入れます。

今のビデオは、岩手県の大槌町の町方地区です。この当時は二〇一三

年なので、現地にはまだ何もありませんでしたが、今は復興が進んでいるいろいろなものが建っています。文化施設もあって、これはまさにその場所です。ワークショップで使っていた模型は、新しくできた町民文化センターに展示してもらっています。毎朝のように子どもたちが触って、壊すといったことがありますが、壊れてもまた直せばいいです。記憶は、GISが理想ですが、エクセルなどでためているので、一年に一度ぐらい直しにくるといった感じですが。まさにこの場所の模型なので、触れてもらうようにして、記憶の継承とはどういうことを今、考えています。

5. 記憶が街を作っている

井戸端会議

この模型も、先月十一月にフォローアップのワークショップの形で行ってきました。先ほどのビデオで出ていたおばあさんが言っていたように大槌の町方地区は、駐車場にごみを敷いて、季節のいいときには屋外の宴会をする文化があります。それは金石市にはないとのこと。それがなぜあるかというと、大槌の町方地区には、自噴水による自然湧水がたくさんあります。それによって井戸が五〇カ所から六〇カ所あったので、井戸端会議をするカルチャーが育っていて、みんなが近隣の屋外で集まるのが、日常的な風景だったとのこと。その話がワークショップを機に聞かえてきました。

この町民文化施設の建物のコンセプトが「文化の井戸端」と決まって、井戸端会議が好きな町衆とあったアイデンティティができています。今、新しく整備をされた所は、まだ家も十分には建っていませんが、町民の方が駐車場で屋台村を始めたところ、震災後誰も寄り付かなかった中心部に人がたくさん来るようになって、自発的な活動も生まれ始めています。課題は多いですけども、街の人た

ちが元気づいていく中で、模型も端で参加をさせてもらっていることが、とてもよかったと感じます。

街はインフラが作るのではない

僕らは建築や街といえば、道路やハードウェアなどのインフラストラクチャーでつくるといいます。本当に大事なことは、街は記憶でできていて、記憶が街をつくっているわけです。

この記憶は、単に過去のことだけではなく、過去のことをもう一度、現在にリプレイをする行為そのものの中に、街を生き生きとさせることや、地域の文化的な資源価値を上げていく仕組みがあるのではないかと感じます。私たちは、これから公園や建物を造るときも、その思いでするように少し方法が変わってきました。

本プロジェクトは、ありがたいことに今も続けさせてもらっています。インドネシアのガジャマダ大学のイカプトラ先生と協力して、初めてインドネシアの大学と神戸大学と一緒に模型を作って、ワークショップも行いました。

日本のワークショップとほとんど変わらないぐらいの盛り上がりを見せました。インドネシアだろうと、日本だろうと、地域の愛着ある部分に対する思いに、国の違いはあまりないのではないかと感じました。集落調査を学生時代にしてきた身としては、類似性は非常に大事ですが、文化と場所の多様性における類似と差異の構造関係が明らかになれば、もう少し空間の質的な部分での国際交流にもつながっていくのではないかと考えています。ありがとうございます。

総合討論

— 記憶の記録化、その広がりど豊かさ、そして課題 —

金子 本シンポジウムは、東日本大震災の記録の記憶化というテーマを掲げました。四組の先生方から、大変に興味深い活動内容のご報告がありました。それぞれの興味深い活動の背景には、記憶の記録化についての、異なった専門性やアプローチがありました。ここからは、ご来場いただきましたみなさまからご質問をいただき、議論を開いていきます。ぜひとも積極的に質問をお願いいたします。

参加者① 西村先生にご質問があります。私は全国の大字誌に相当するものを調べて、いろいろと見つけています。レジュメには書いてあって、話でははしょられたのかもしれませんが、地元の方が大字誌を作る際の関与の仕方に興味を持ちました。一般的に大字誌などを作るときには、アカデミックな方はあまり入ってこないことが多く、地元の方たちが多いようです。委員会が請戸につくられていたとのことですが、委員会の構成や立ち上がり方と、両竹でもそれに該当するものはつくっていたのでしょうか。ご教示ください。

西村 ありがとうございます。請戸に関しての編さん委員会は、地元の区長さんをトップに、区の役



員の方々が専門のメンバーになっています。区の役員の一人に浪江町の町史編さんに関わっている方がいました。われわれ自身は編さん委員には入っていないわけではなく、あくまでも請戸に関しては執筆者でした。両竹に関しては、地区のほうでしてみたいとの話はありましたが、編さん委員をつくることはありませんでした。僕と両竹出身の学生さんだった泉田さんの二人で考えてみようとのこと、区に投げかけました。区に投げて、例えば使っている写真や、地区に配布するときの住所を教えてもらおうといったやりとりをしました。両竹に関しては、われわれのNPOが中心に行いました。

参加者② 皆さん、今日は報告をありがとうございました。皆さんに質問をしたことがあります。

いずれの記憶の取り組みも、きっかけや動機は、そこで暮らしてきた方や経験してきた方々のために記録を形にして、残すといった側面があります。記録をすると表現物になるので、当事者の人たちだけではなく、外にいる人たちにも記憶が形になって届くことがあります。外に向けて記録を届けることについて、何か工夫をしていること、これからしようとしていることがあればお聞きしたいです。

西村 どうもありがとうございます。僕自身のこと、『大字誌』といわれる歴史の本です。そもそも僕自身は当事者でもなく、福島と縁もゆかりもないので、自分自身はあんまり使命感でしているつもりはありません。使命感を持つとどこかで疲れてしまい、長続きしないからです。先ほど共有の話もしましたが、その地域の歴史が面白いと伝えるこ

とよつて共有ができると考えています。当事者とも共有をしたいし、全く関係ない人間とも地域の歴史は面白いんだと共有することで、『大字誌』を作っています。

また自分自身はダムで沈んだ村の出身です。しかし、ダムで沈んだ村の三世に当たるので、もとの当事者意識はありません。今日、話をした請戸や両竹も世代を超えると、絶対に当事者意識はなくなつていきます。それを何らかの形で残せることは、もしかしたら意味があるのではないか。みんながもう、よそ事になつていくので、その意味で残したいと活動をしています。

吉田 答えになるか分かりませんが、僕はもともと写真という機械を使って記録をする実践をしています。先ほども話をしましたが、最初は写っている人たちへのプレゼントとして、写していたものです。それを他の人にも見ってもらつて、事実を知ってもらいたいと、今は展示をさせてもらっています。撮っているときは、そのような趣旨ではありませんでした。写真だけを見たら、お母さんと子どもたちの本当に朗らかない写真といえますか、明るい写真です。それだけを見せても、この問題は全く伝わらないと感じて、どうしたらいいかと考えたときに、お母さんたちの生の声を文字にして横に添えることで、伝えるスタイルを思いつきました。

展示をすることで気づいたこともあります。それは、僕には福島が見えていなかったということ。こちらにいる彼女たちや子どもたちは見えていましたが、向こうではどのように暮らしているのか、土地そのものはどうなっているのかとの思いが募ってきて、去年から向こうに通うことを始めました。少しですけれども展示の割合を割いて、福島で撮った写真も出すようにしています。この展示は、最初は一回切りなのか続けていくのか、何も決めないまま見切り発車しました。しかし、今は、伝え続けていかなければ意味がないと考えているので、続けていきます。僕の写真も、福島に通い、

相模原での撮影も続けることで常に変化をしています。どうしたら皆さんにこの問題をより正確にお伝えできるか、いろいろな方法を考えながら続けていこうと思っています。

鹿目 私は、研究者でも何でもなく一人の母親ですので、その視点で回答をします。震災当初、小さい子どもを抱えながら何かをしたいお母さんたちに、いつもよく話をしていたことがあります。そのお母さんたちがなぜ動くのかといえば今、抱えている子どもの未来を大事に考えているからです。そのお母さんたちに伝え続けてきたのは今、抱えている子どもの幸せを一番に考えて、ベストを尽くしてください。その先は必ず被災地や、苦しい思いをしている人たちの未来につながりますとの話をしていました。

自分の子どもや、自分の大切に行っている人たちの幸せを考えたら、この先で何か選択をするときに、選択が変わっていきます。その選択は、ほんの一ミリでも右に向いているだけだとしても、その未来は大きく振れるわけです。それが子どもたちの未来を守ることにつながるのではないかと感じ、伝えていきます。私も、のように自分の娘に対して接しているし、娘の周りの子どもたちにも同じように接しています。私は、形に残すことはしていませんが、その思いを紡ぐ形で続けていきたいと考えています。

植田 今のご質問は、記録をすることが表現にもなるのではないかとのことでしたが、その通りだと感じています。それが表現になってしまうことの意味は何かと考えたときに、地域づくりではよく知られた地元学の取り組みに重なると思います。水俣では吉本哲郎さん、宮城県では結城登美雄さんが有名です。そのときに最初にやる仕事として、「あるもの探し」があります。まずは、この地域が何を持っているかを言葉や文字にすること、絵に描くことや写真に収めることから始めていき



ます。「ないものねだり」ではなく、「あるもの探し」といいます。この地区が何を持っているのか、どんな小さな葉っぱでも収穫しているものを全種類、川の魚といったちよつとしたものでもとにかく全て書き出していくということをしします。

そのとき、資源とさえ考えられていなかったものが湧き出てきます。外の人々が記録をしようとしたときに、地元の人にとっては、たわいのないことかもしれないことが可視化されていく過程があります。梶橋先生の発表に出てきた駐車場で行っていた宴会は、豪勢なものでもないし、外に誇るようなものではないと震災前は考えておられたかもしれません。それが見えてくるといいますか、自分たちがどのようなものを持っていたのかを再認識されます。外からの目と、中からの目が衝突をすることで、そこが持っている資源が形になっていくプロセスがあると思います。

梶橋

ありがとうございます。今、植田先生が言ったことは、全くそのとおりです。追加で表現のことでは、僕たちのプロジェクトの場合は、ものとしては巨大な模型でやりとりをします。動かすのも大変、体力が要ります。一度、盛岡で、岩手の被災地の模型を集めた展覧会を行って、ものすごくたくさんの方が来て、大変に喜んでもらえました。東京に避難をされてきた人との、コミュニケーションの話もちろんありますが、娘を頼って、沿岸部から盛岡に引っ越してきて、心を病んでしまった人。

例えば、自分が現地から逃げたように感じて病んでしまった方や、大変な状況にある沿岸部に

軽い調子で行くことに気が引けるといった期間を過ごされた方は、相当数、います。その方々に見てもらうことができるのは一つ、まとめになると感じます。東京にも東北から避難してきた方や、次のステップとして移ってきた方が、すごくたくさんいます。今はITなども進んでいるので、何か場所や記憶をデリバリーできるようなテクニクといますか、いろいろな地域で、自分のふるさとをコミットできるような仕組みは今後、どんどんとできていくといいと感じています。

参加者③ 母ちゃんずの活動に興味を持ちました。二つ質問をさせてください。母ちゃんずの活動は、福島から被災をされてきた方ばかりではなく、相模原の方も含めて活動を行っているわけですか。

鹿目 はい。母ちゃんずは、神奈川県相模原市で当時、同じ幼稚園に通わせていた有志のお母さんたちで立ち上がっています。私は被災をして、相模原市に避難をしていて、そこでたまたま一緒にしないかと声を掛けてもらって、参加をしています。私以外のお母さんたちは、もともと相模原市で生活をしていたお母さんたちです。その人たちが運営をして、福島で被災をして、子どもに外遊びさせることが不安なお母さんと子どもを相模原に招いて、キャンプをしています。

参加者③ もう一つは、設備や備品についてです。ボランティアをするうえで、なかなか負担になる部分だと思いますが、そのキャンプはどこか建物を借りて、行っているわけですか。また、食事や寝具は、全て母ちゃんずのボランティアが負担しているのでしょうか。

鹿目 町田市と相模原市の青少年センターといわれる市の施設を借りています。最初は、すぐに町田市が無料にくれたので借りていて、相模原市も福島の人たちの支援であれば無料で貸すとの話になって、そこを利用させてもらっています。食材もお母さんたちは心配をしているので、安全なものを入れて、全て手作りです。野菜中心の食事を作っています。寝具は、その施設にあるものを

使っています。

参加者④ 槻橋先生にご質問があります。先生は、神戸大学にいらつしやるとのことですが、神戸の阪神淡路大震災の経験が、ご活動にかかされているのでしょうか。

槻橋 一九九五年は、私は大学院生で東京において、世界の集落調査をしていた頃です。阪神淡路大震災に対しては学生だったので、ほとんど何もできませんでした。

ちょうど東日本大震災のあった二〇一一年は、仙台で先生を六年半してから、神戸に行つて一年足らずのときでした。僕の周りには阪神淡路の復興で、随分と頑張ってきた皆さんがいました。僕はあまり経験がありませんでしたが、ずっと仙台にいたので、何かやらなければならないとの期待をされる立場にもなっていました。

建築を造ることと、学生に教えることとで、この津波や大災害に対して、どのような態度を取ればいいのかを考えなければならなくなりました。当時、神戸大学の教授だった室崎益輝先生（兵庫県立大学教授）にこのプロジェクトをしようと考えていますがどうでしょうかとの相談をしました。先生からは「ぜひおやりなさい」と背中を押していただきました。

参加者⑤ 今日のシンポジウムは、いろいろと勉強になりました。私は、上京をしてから五十年が過ぎますが、福島市の出身です。兄は陸前高田で被災をして、ヘリコプターで救出をされました。実家は、農家です。今日の話聞きながら、例えば自然科学が示す放射能のデータや数値の問題と、皆さんが各ジャンルで研究をされて、アーカイブにしていこうとする記憶データの違いを感じました。

より自分の身近で考えると、上京をしてからずっと農家のリンゴや桃、お米を全て送ってもらっ

ていました。今年も送ってもらっていますが、3・11の年にはストップでした。皆さんも知っているとおりですが、3・11の翌年から全量検査とのことで、お米や果物の検査がありました。まさに全部なので、膨大な費用がかかったとのことです。そういった検査データの数値の問題と、今回、アーカイブとして扱うデータなどの違いを感じました。全量検査でOKと出ていても、学生さんは不安といます。今日の話聞きながら、データとは何かと一人考えていました。

鹿目 私も当事者として、その部分はとても複雑な思いでいます。私は母としてなので、子どもの命や健康を守る点では、一時期は食べさせたくないと感じていました。私の住んでいた所の周りは皆さん、農家でした。私は、すぐに避難をしたわけではありません。一番混乱をしていた震災後の四カ月は、福島にいたので、近所の農家さんたちの思いもたくさん聞いていました。

私も実際に福島のお米と野菜、果物で育って、私の娘も土地の力で健康に育っていたので、本当に数値自身の何が一番、正しくて、何が間違っているのかは全く分かりませんでした。私の中で、何を頼りにしなければならなかったのかと考えると、そこが一番、苦労をした部分ではあります。私は、大丈夫な土地から避難をしたので、選択したくない二択の選択肢を出されて、どちらかを選ばなければならなかったわけです。

子どもの健康が不安だから避難をしたい思いと、先ほど話をしたように土地に愛着を持って、そこで家族と一緒にずっと暮らし続けたいとの気持ちがあつて、本当にどちらも選びたくありませんでした。数値の面で、この数値は本当に危ないのか、危なくないのか。今回の問題では、どうしても自己判断に任された感じがしました。数字で語りたくないけども、それで傷ついている人たちがいる中で、それぞれの選択を尊重できるような支援や取り組み、関わり方をしていかなければなら

ないのが、九年目にかかる私の思いです。何がいいか悪いか、それが正義か正しいかの前に、それぞれの思いと生き方を尊重していくことが大事だと感じています。

金子 活発な議論をどうもありがとうございます。最後のご質問とも絡むことですが、本シンポジウムでは、客観的な数値の問題だけでなく、そこにどのような人々がいて、どのような思いをもって生活していたのか、人びとが受けた痛さや楽しさといった感性までをも含み込んだ記憶の議論ができたと感じています。その意味で、東日本大震災の被害を、ただ「知的に理解」するだけにとどまらない、感性までを含めた記憶の議論が展開できたように思います。

ところで、現在、震災についてふれる機会や考える機会が、だいぶ少なくなった印象をもつております。今日、四組の先生方からご教示いただきましたポイントを活かしながら、被災地との協働をさらに進めていきたいと思えます。最後になりますが、本学地域交流センター長の土居洋平先生より、閉会のご挨拶をいただきます。土居先生よろしくお願いいたします。

土居 皆さま、本日は年の瀬のお忙しい中、地域交流センター主催の本シンポジウムにお越しいただきありがとうございます。登壇者の皆さまにおかれましても、大変に有意義なお話を頂戴しまして、誠にありがとうございます。

最初に話がありましたように、本学の地域交流センターは、本年四月に現在の体制となりました。大学の取組みとしては遅いほうかもしれませんが、まさに、これから地域に出て、地域の皆さまに何ができるのかについて本格的に考え出したところです。

本日のシンポジウムは、本学が被災地と正面から向き合って、何ができるのかを考える第一歩として企画したものです。しかし、本日のお話しは、その第一歩に留まらず、二歩、三歩進んだよ

うな、ぐつとくる話をお伺いしたように考えています。私どもは、来年度以降も今回のような形で、さまざまなお話や、地域の方と一緒にできるような事業を行っていかうと考えています。さまざまなお話や、地域の皆さんと歩んでいければと考えておりますので、どうか、地域交流センターと本学をよろしくお願ひします。本日は、どうもありがとうございました。

執筆者一覧



金子 祥之 (かねこ・ひろゆき)

跡見学園女子大学地域交流センター助教

主要業績：『東日本大震災と民俗学』（成城大学グローバル研究センター、2019年）、『原発災害と地元コミュニティ——福島県川内村奮闘記』（東信堂、2018年）など



西村 慎太郎 (にしむら・しんたろう)

NPO 法人歴史資料継承機構じゃんぴん代表理事・国文学研究資料館准教授

主要業績：『生実藩』（現代書館、2017年）、『宮中のシェフ、鶴をさばく』（吉川弘文館歴史文化ライブラリー、2012年）など



吉田 智彦 (よしだ・ともひこ)

写真家・文筆家

神奈川県相模原市を中心に行なわれている保養キャンプの7年間を撮影。写真展「心はいつも子どもたちといっしょ」を開催している

主要業績：『熊野古道巡礼』（東方出版、2004年）、『信念 東浦奈良男〜万日連続登山への挑戦』（山と溪谷社、2012年）など



鹿目 久美 (かのめ・くみ)

母ちゃんズスタッフ（福島からの避難者）

福島で被災し、避難後の経験を語る活動や支援者のためのサロン開催などの活動をしている



植田 今日子 (うえだ・きょうこ)

上智大学総合人間科学部教授

主要業績：『街からの伝言板——次の地震に遭う人に、どんな伝言を残しますか』（ハーベスト社、2017年）、『存続の岐路に立つむら』（昭和堂、2016年）、『災害文化の継承と創造』（臨川書店、2016年）、『災害と村落』（農文協、2015年）など



槻橋 修 (つきはし・おさむ)

神戸大学大学院工学研究科准教授・株式会社ティーハウス建築設計事務所

主要業績：作品「Book Farm 神戸市立北神宮図書館」（2019）、「南町田グランベリーパーク・鶴間公園ランドスケープ」（2019、福岡孝則と共同）。2014年「失われた街」模型復元プロジェクトが第40回放送文化基金賞、2015年日本建築学会賞。

跡見学園女子大学地域交流センターブックレット vol.1

東日本大震災と「記憶」の記録化

—試みとしての地域史・写真展・記憶地図・街の復元—

発行日：2020年3月15日

著者：金子祥之・西村慎太郎・吉田智彦・鹿目久美・
植田今日子・槻橋修

編者：金子祥之

発行：跡見学園女子大学地域交流センター

〒112-0012 東京都文京区大塚1丁目5-2

電話：03-3941-7420

印刷：セントラル印刷(株)

東日本大震災と「記憶」の記録化

—試みとしての地域史・写真展・記憶地図・街の復元—

2020年3月

笠原清志

記憶の記録化に寄せて
—生活の営みをいつまでも忘れない—

金子祥之

被災地との地域交流のこれまでとこれから
—跡見学園女子大学での取り組みをもとに—

西村慎太郎

原子力災害地域の歴史を未来へ紡ぐ
—大字誌という方法—

吉田智彦・鹿目久美

笑顔の向こうがわ
—保養キャンプで出会った母子の日常にある
矛盾と不安—

植田今日子

『更地の向こう側』の記憶地図
—気仙沼市唐桑町宿での試みから—

槻橋修

ふるさとの記憶
—「失われた街」模型復元プロジェクト—

総合討論

金子祥之・西村慎太郎・吉田智彦
鹿目久美・植田今日子・槻橋修